
デジモンファイナリー

則長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンファイナリー

【Nコード】

N5142M

【作者名】

則長

【あらすじ】

7人の子供たちのデジタルワールドでの冒険
平凡な生活をしていた7人が未知の戦いに巻き込まれていく。
デジモンオリジナルストーリーです。
オリジナルデジモンも出てきますので。

冒険のはじまり

ここはどこだろう・・・

そう思っていると突然、後頭部に痛みがおこり俺は意識を失った。

―冒険の始まり―

8月1日

俺がその日目を覚ましたのはじいちゃん、保科源内の声だった。

「達也、起きなくていいのかー今日は友達が来るんだったんだろ」

時計はまだ8時。今は夏休みなので普通の小学生である俺はまだ寝ていたかったが今日はそんなこと言ってられない。

今日の午前9時から家でパーティーをするからだ。

何のパーティーかというそれは夏休み前日のことだった・・・。

「達也ーちよつといい?」

明るい声で話しかけてきたのは俺のクラスメイトであり幼馴染の亜沙である。

「なn「あのさあ、今度達也の家で加納君の歓迎パーティー開くよ。」

「ちよつと待て、なんですでに決定してるんだ、しかも俺の家で」

「いいじゃん達也、加納君ともう仲良くなってるんだし。それに達也の家大きいし。」

「好きであんな家住んでるんじゃないよ」

そうだ。俺の家はこころへんじゃ一番でかい。なぜかという俺の父親、保科達郎は世界でも有名なデジタル科学の研究者でかなり金をもうけてるからだ。でもあいつは今まで俺に遊んでくれたことなんて片手で数えられるぐらいしかない。しかも俺が幼少のころであいつがまだ駆け出しのころだったからだ。

それ以来は研究に没頭し相手もしてくれない。そのせいで母は妹を連れて出て行った。だからあいつは嫌いだ。あいつのお金で建てた家になんか住みたくない。

けど俺は今行きてられるのはあいつのおかげだ。それがわかってるこそ悔しい。

そのこと思い出した亜沙は急に静かになって。

「ごめん・・・」

と言い、目がにじんでいるようだった。

俺は亜沙のこの目にめっぼう弱くなんでも許してしまう。

別に亜沙に対して恋愛感情があるわけでもない。しかし昔から運動で俺に負けたことのない活発な亜沙のこんな一面を見せられてしまうとうとうにも許してしまう。

「別に純樹とは仲いいからいいぜ」

「本当に？ やったー」

「でも純樹には確認とったのか？」

「うん、大丈夫。さっき話してきたし時間も日にちもメンバーも決めてあるから」

「お前、なんで家主に了解とるのが最後なんだよ。順番おかしすぎ。」

と言うわけで今日がその日9時にみんなが来る予定になっているので早く準備しなければいけない。

部屋を片付けながら今日来るメンバーを思い返してみた。

（「ええと・・亜沙とその弟の友哉、俺の妹の由香里に健士、あと佐藤だったよな。」）

ピンポーン

「ただいまー」

「「「「おじゃまします」「」「」」」

最初に入ってきたのはおそらくただいまと言ったので由香里だろう。別にチャイム押さなくてもいいのに。

その後5人の声が聞こえたのでみんなで待ち合わせでもしていたのであろう。

「お兄ちゃん久しぶり」と抱きついてくる。

「おう！由香里久しぶりって言っても3日前来ただろ」

「仲、むつまじいなシスコンよ」

「ええ！保科君ってシスコンだったの！？」

「いや、佐藤真に受けるな。冗談に決まってるだろ！」

そんなことを言いながら続々と部屋に入ってくる

「達也さんお邪魔します」

「おう、健士久しぶり」

「・・・達也君お邪魔します。」

「純樹はやくこっち来いよ。今日はお前のためのパーティーだ」

こうしてみんながそろいパーティーが始まった

パーティーと言っても小学生のものだ。

ケーキやらが出るわけでもなく市販のお菓子を食べながらみんなでトランプなどをしていた。

達「また亜沙のまけ」

亜「達也だってあんまり人のこといえないでしょ。」

り「それより健士君でトランプ強すぎだよね」

健「いや、そんなことないですよ」

達「健士は強いに決まってる。なんたってIQ135の天才だから」

由「お兄ちゃんが自慢してどうすんの」

友「そうですよ、ねえ純樹さん」

純「うん、そうだよ達也君」

部屋中にみんなの笑い声が響く

純樹もみんなとかなり打ち解けてきたようだ。

友「お兄ちゃんそろそろみんなでWiiしよ」

達「そうだな。まず最初は俺が純樹の腕を見てやろう」

純「わかった」

これは格闘ゲーム。俺はの中でも結構強いほうだと自身はあった。しかし開始5分で決着がついた。結果は俺の惨敗。

亜「達也よわ」

達「亜沙には言われたくないぞ。しかし純樹おまえ強すぎだよ」

純「そうかな？初めてやったんだけど」　り「初めてなのにすごいよ加納君」

健「ええ、本当にすごい。いくつもの戦術が練りこまれながら攻撃。とても人のできることとは思えません。」

由「ねえ、純樹さん今度は私とやろう。」

こうしてみんな純樹と戦ったのだが1人も勝てなかった。

友「お姉ちゃん、お腹すいた」

亜「そうね。そろそろお昼つくろっか」

健「亜沙さん料理できるんですね。尊敬します」

達「スポーツだけが取り柄の亜沙にそんな器用なことできるわけないだろ」

亜「ちょっとそれどういうことよ!!・・・まあできないのは確かだし。料理するのは由香里ちゃんとりんだよ。私たちはお手伝い。」

由&り「がんばりまゝす」

料理は結構豪華になった由香里の料理はぴかいちだってわかってるけど佐藤の料理もとてもおいしい。さすがいつもしっかりしてるだけはある。

そして楽しい昼食と片づけが終わりみんな自由にしていた。

健「達也さん、この回線使ってもいいですか？」

どうやらノートパソコンにつながみたいだ。

達「たぶんいいぞ勝手にやっちゃって」

健士が回線をつないだ瞬間部屋中が光に包まれた。

達「・・・なんだったんだ、いきなり・・・ここはどこだ！
！！！！！！ 森？ ジャングル？ ターザン？ 俺家にいたよな？」

自分に問いかけるがそんなこと知る由もないのでひとまず立ち上がり
ここはどこだろう・・・

そう思っていると突然、後頭部に痛みがおこり俺は意識を失った。

続く

次回予告

突然気絶した達也。果たして何があったのか？
そしてほかのみんなの行方は？

デジモンファイナリー第2話

「デジタルワールド！？」

迫りくるスナイモン」

冒険のはじまり（後書き）

とにかく読んでくれて嬉しいです
1日1話更新で行きたいと思っています

デジタルワールド！？迫り来るスナイモン

「達也ー達也ー」

俺の耳にしない声で俺の名前が響いてきた。
だんだん意識は戻ってくる
目を開けた瞬間俺は見たことのない生物を見ることになる。

「わーい達也がやっと目を覚ました」

目の前でアニメにでも出てきそうなちっちゃい竜みたいな生物が喜んでるように見える。

「お前、誰だよ！？ここはどこなんだ！？」

「僕はコドラモンで達也のパートナーデジモン。ずっと達也を待っていたんだ。そしてここはデジタルワールド。ああっデジモンって言うのは僕たちのような動物みたいなもの。デジタルワールドってのはデジモンがすむ世界。」

突然意味のわからない単語を次々と出されたが説明付で何とか理解できた。

こいつの名前がコドラモンっていつて俺のパートナーデジモン。ここがデジタルワールドって言って俺たちの住んでるところじゃないってこと。

「よろしくね、達也」

「よ、よろしく」

手を出してきたので握手をした。

俺が次にどうしようか迷っていると後ろからいつもよく聞いている声が聞こえてきた。

「達也。おい」

「亜沙！、それにその隣のは！」

亜沙が元気よくこちらに走ってくる。しかもその隣はデジモンらしきものがある。

「達也、ようやく会えた。こっちはフローラモンよ。あたしのパートナーデジモンなんだって。それで達也の隣にいるのは達也の・・・」

「そうだよ。僕は達也のパートナーデジモンのコドラモン。よろしく。」

「亜沙、お前なんでそんなにハイテンションなの？こんなみしらぬ世界に来たのに。」

「だって楽しそうじゃない、未知への冒険みたいで」

普通は戸惑うだろと思うがこいつだから仕方ないとも思ってしまう。

「そういえば達也そのゴーグルどうしたの？いつもつけてるのだと

思うけどさつきはつけてなかったでしょ？」

「ゴースル？・・・ああっ本当だいつの間に」

そう、このゴースルは俺が外に出るときつけているものだ。理由はじいちゃんを買ってくれたからだ。だが家ではつけずに大事にしまっている。あの時も例外ではなかった。

そんなことを思っているとまた声が聞こえた

「おにいちゃん」「おねえちゃん」

由香里と友哉だと思いよくみると由香里は両手に友哉は首にデジモンらしき生物がいるのが見えた。

二人がこっちに来て由香里が笑顔で喋りだす。

「お兄ちゃん、亜沙さん紹介します。こっちが私のパートナーデジモンのプロットモンでそっちが友哉君のパートナーデジモンのクダモンだよ。」

「よろしく」

プロットモンは明るくクダモンは少しくールに挨拶してきた。

続いてこっちのデジモンも自己紹介を試してみんなでこれからのことを話そうとすると遠くから「ブウウーン」と蜂のような騒音が聞こえてきた。

そして一瞬にして目の前に立っていた木々が倒れそこにあらわれたのは・・・

「かまきり!？」

「違うよ、あれはスナイモンだ。とても凶暴なデジモンだ。来るよ！」

いきなりでかいカマキリもどきが出てきて俺がパニックになると由香里が手を握り

「逃げるよ、お兄ちゃん。」

と言い走り出した。

なんて頼りになる妹なんだと思いながらも自分が情けなく感じる。しかしまず逃げるのが最優先だ。幸い亜沙も同じことを思ったらしく友哉の手を握り走り出そうとしていた。

しばらく走り続け森をぬけたと思ったらそこは崖であった。しかし唯一いいことと言えばそこに見知った人がいたからだ。

達「健士、純樹、佐藤！」

そう、そこには各々自分のデジモンを連れたパーティーにいたメンバーの残り3人がいた。

健「みなさん、無事でしたか!？」

亜「逃げてゝみんなスナイモンが来る」

り「スナイモン!？」

佐藤がそういった瞬間森からやつが現れ俺たちの前に降りた。

純「な、な、何あれ!？」

チ「あれはスナイモンです。純樹たちは下がってください。」

そしてデジモンは前に出て人間は後ろに下がろうとしていたが俺だけ間違っただけ別の方向に行ってしまった。

達「ええっ、みんなそっちに！やばっスナイモンがこっちに来る。」

ス「シャアっーーーー」

コ「達也ー　ベビーブレス」コドラモンの口から放たれた黒い炎がスナイモンの背中に当たるがピクリとも反応しない。

ほかのデジモンたちも攻撃するが何の意味もない。

そしてスナイモンがだんだん迫ってくる。

由「お兄ちゃんーん」

「ジリジリッ」

崖の先端まで来てしまったもう助からない。

コ「達也ー」

そう思ったとき腰のほうに光りだした。その瞬間……

コドラモン進化ー

ダイノモン！！！

達「形が……変わった……ダイノモン！？」　そこにはコドラモ

ンが大きくなり尻尾と腕に刃物のようなものがついたデジモンがいた。

ダ「うおおおお」ダイノモンはスナイモンを後ろからつかみ投げ飛ばした。投げ飛ばされたスナイモンは飛び上がり姿勢をたてなおし、さきほど大木をきった斬撃をはなってきた。

ダイノモンは腕の刃物でその攻撃をはじきそのままスナイモンに突っ込みスナイモンの胸の赤いマークに腕を突き出した。

「ダイノフィンガー」

見事に攻撃は決まりスナイモンは光とともに小さくなりやがて小さい毛虫のようなデジモンになりその後逃げていった。

いつの間にかダイノモンもコドラモンに戻っておりこっちに近づいてくる コ「たつやー怪我はないかー？」

達「大丈夫だよ。それにしてもお前さっきのは？」 コ「あれは僕が進化して成熟期のダイノモンになったんだよ。」

達「進化！？すごいなコドラモン」 そんなことを言ってるといういきなり体が宙に浮いた気がした。いや、浮いたんだ。がけが崩れた俺とコドラモンがまっさかさまに落ちてゆく。

達&コ「うあああああああ」

続く

次回予告

達也とコドラモンが崖から落ちた。

ふたりの運命は！？

デジモンファイナリー第3話

「亜沙を守れ フローラモン進化」

デジタルワールド！？迫り来るスナイモン（後書き）

ダイノモン

ワクチン種 恐竜型 成熟期

コドラモンの成熟期。もともとくろかったコドラモンが巨大化し腕にはクロー尻尾には剣がついている。

必殺技 ダイノフィンガー 通常技 ダイノブレス

亜沙を守れ フローラモン進化

「うああああああああ」

俺たちもう死ぬのか？・・・と思った瞬間いきなり体が宙に止まる。隣にもコドラモンが同じ状況になっている。

上を見てみると亜沙のパートナーデジモンのフローラモンの手から植物の触手見たいものがのびている。

亜「さすがフローラモン。GOOD JOBよ。そのまま引き上げてくれる？」

フ「うん、わかったよ亜沙」

俺たちは何とかたすかった。

由「よかったあ、お兄ちゃん。ありがとうフローラモン。」

由香里が多少涙目になりながらフローラモンにお礼を言っているとコドラモンの周りにほかのデジモンたちが集まってきた。

ホ「すごいですねコドラモン。」

ガ「俺たちのなかで一番に進化するなんて」

チ「どうやったら進化できたんだ？」

デジモン達が進化の話で盛り上がっていると純樹は興味を持ったのか話に加わろうといていた。もともとゲーム好きの純樹なら進化とか戦うけいも好きなのであろう。

純「僕も知りたいなあ」

コ「うーん、僕もよくわからないんだ。達也を助けたいと思ったらいきなり進化して。」

り「ちょっとみんな集まって。これからことを決めましょう。」
さすがにしっかりものの佐藤だ。みんなをまとめようとしている。

り「まずどうしてここに来てしまったかはおいといてこれからどうするかを考えましょう。ホークモンの話だとこの世界に人間はいないらしいの。だからまず帰る方法を見つける、でもそれは時間がかかりそうなのでまず食料を集めましょう。」

健「そうですね。そしたらやっぱり数組に分けたほうがいいですね。」

亜「じゃあ私は友哉と一緒にいくわ。」

友「うん」

達「じゃあ俺は由香里と」

り「じゃあ私は健士君と加納君とね。今から2時間後にまたここで待ち合わせね。時間は・・・みんなも持ってるよねこれ」

それはさきほどコドラモンが進化したときに光ったものだった。
こうしてそれぞれデジモンをつれて歩き出した。

〽1時間後

由「プロットモン、疲れてなあい？」

プ「大丈夫だよ、由香里こそ大丈夫？」

由「うん、ありがとう。私は大丈夫だよ。」

達「みつからねえ〜コドララモン、こっちに果実があるんじゃないか
ったのかよ？」

コ「う〜ん、あった気がするんだけどなあ」

達「気がするじゃないよ・・・朝飯食べてないから腹減ったああー」

由「もうっ、またお兄ちゃん不規則な生活してる。」

達「しょうがないだろ。じいちゃんも俺も料理できないんだから」

由「まさかおじいちゃんにもカップラーメン食べさせてるんじゃない
いでしょよね？」

達「じいちゃんが進んで食べてるんだからいいじゃん」

由「だ〜め。お金あるんだからおじいちゃんだけでも家政婦さん頼
みなさい。」

達「なんでじいちゃんだけなんだ？」 由「おにいちゃんのは・・・
私が作ってあげる・・・」

達「やさしいなあ由香里は。ありがとう。」

そう言うとき由香里は照れたようで赤面しながら「早く探すよ」っと言ひ少し早歩きになった。

プ「由香里はお兄さんおもいな良い子だなあ。」

コ「さっきから見ると達也が弟に見えるよ・・・」

ガ「何やってるんだ、健士？」

健「パソコンは起動するんだけど、インターネットがつながらなくて。」

純「この世界じゃできないのかもしれないですね。」

チ「純樹くこっちにも果物あったよー」

純「うん、わかった今行くよ」

リ「でもホークモン、これ食べれるの？毒はいつてたりしない？」

ホ「安心してください、りんさん。これは私たちがいつも食べているものですから」

リ「そっか、それならいいんだけど・・・健士くんそろそろってっだってー」

健「今行きます。行くよガンナモン。」

ガ「はい、健士。」

亜「友哉くなんかあったー？」

友「何も見つからないよー。クダモンは？」

ク「何もありませんよ友哉。フローラモンは？」

フローラモン「うんく・・・こっちも見つからない。」

亜「もうちょっと奥にいつてみよう。」

4人は森の奥へと歩いていくと建物が見えてきた。

友「お姉ちゃん家が建ってるよ。」

亜「うん、行って見ましょう。」

中に入ってみると果物や穀物がたくさんあった。

フ「ここは食料保管庫みたいね。これでしばらく食べものは問題ないね。」

亜「うん、じゃあ運びださ「おい、おまえら何やってるんだ」

4人が振り向くとそこにはレッドベジーモンがいた。

レ「それは俺のもんだぜ。手だすなよ」

友「お願いします、少しだけ分けてください」

レ「誰がやるかよ」

そういうとレッドベジEMONは自らのうでを友哉に巻きつけて持ち上げた。

友「うああああああ」

ク「友哉ッ・弾丸旋風」

フ「アレルギーシャワー」

2対のデジモンがレッドベジEMONに攻撃するがもう片方の腕に弾き飛ばされる。

亜「友哉ーーーー」

亜（「友哉を助けなきゃ、大切な家族を。」）

亜沙は近くに落ちていた木の棒を持ちレッドベジEMONに突っ込んでいった。

レ「そんなものが効くかー」レッドベジEMONはうでで亜沙を殴り飛ばした。

「亜沙ーーーー」

その瞬間フローラモンの体が光に包まれた。

フローラモン進化ー トゲモン

亜「トゲモン・・・フローラモンが進化した。トゲモンがんばってー」

ト「いくわよー チクチクバンバン」

トゲモンの体からいっせいに針が飛び出しレッドベジEMONに突き刺さる。

レ「うわーもう勘弁をー」

友哉をはなしすぐ逃げて行ってしまった。

友「おねちゃん」

泣きながら友哉が亜沙に抱きつく

亜「もう大丈夫だよ友哉。ありがとねフローラモン。」

亜沙はいつの間にか戻っていた相棒にお礼を言う。

フ「どういたしまして」

続く

亜沙を守れ フローラモン進化（後書き）

次回予告

7人は寝るところを探しているとお城を発見した。

喜ぶみんながそこには闇のデジモンの罠がしこまれていた。

デジモンファイナリー第4話

「真の敵！？闇に堕ちたダルクモン」

真の敵！？闇に堕ちたダルクモン

集合時間

り「へえ、そんなことあったんだ、亜沙。」

友「うん、すごかったよ。よかったんだよ。トゲモン。」

り「まあ食料には当分問題なくなったのはいいことね。」

亜「達也はどれだけ見つけたんだっけ。」

達「うっ、うるせー俺の行った方に何もなかっただけだよ。しかも俺一人のせいだよ。由香里たちもいただよ。」

由「お兄ちゃんが勝手に進んで行っただけじゃない。」

達「うう。」

健「これで食料はゲットしたところだし次は寝るところを探さないといけないですね。」

り「うん。でもちょうどいい寝床なんてないわよね。」

純「あの・・・。」

達「どうした純樹？」

純「あそこに煙のぼってない？あれって温泉じゃないかなあ？」

亜「本当だあ、たしかに温泉の煙っぱいね」

友&由「わーい」

達「じゃあ行ってもようぜ。・・・おーいみんな行くぞ」

そういつて俺はむこうで遊んでいたデジモンたちを呼び歩き始めるのであった

しかし俺たちはこの後このときの決断を後悔することになるのだ・

達「うああ、すげええ。なんかお城みたいだなこれ。」

友「すごい、すごいおねえちゃん早くいこ。」

亜「そうね、行きましょう。」

健「ガンナモン、どうしたの？」

ガ（「こんなところにお城なんかあっただろうか・・・」）

「いえ、何でもありません。行きましょう。」

（男風呂）

友「すごおーい、お兄ちゃんの家より大きなお風呂だ。」

確かに大きな風呂だ。洗い場も5人用ついてるし湯船も一般家庭の

8倍はある。

健「確かに大きいですね、銭湯みたいだ。」

達「はああゝ気持ちいいー」

友哉はちゃんとした家庭で教育を受けているので最初にクダモンと一緒に体を洗っているようだ。
他のみんなも体を洗っていたが俺は早く休みたかったのですぐには
いていたが・・・

コ「達也ーーーーー」

コドラモンがこちらに走ってきて俺にダイブしてきた。
勢いよくお湯が飛び出る。

達「お前いきなり飛び込んでくるなよ・・・」

コ「楽しいからいいじゃん達也」

そう話していると健士が湯船に入ってきた。

健「やっぱり不思議ですね、デジタルワールドは。人間が住んでない、デジモンしかいない世界にちゃんと建物が建っていて温泉があって信じられないことばかりです。だから僕は夏休みの間、ここにいろいろな調べたいと思います。」

達「そうだよなあ。最初は意味が分からなかったけどっていうかまだ半日しかすぎてないんだよなあ。まあ確かに興味はあるよな。」

コ「達也はずっとここにいるんだろ？　そのために僕たちは待ってたんだよ」

達「ああ、いるよ」

コ「やったー」

この時俺は軽い気持ちで言ったが後に俺たちは重大な事件に巻き込まれ、共に闘っていくことになる。

〳女風呂〳

由「わあ〳すごいですね。本当に広い」

亜「達也の家のお風呂より大きいしすごいね。」

り「ええ〳亜沙って保科君の家のお風呂入ったことあるの〳？」

亜「うん、幼馴染だから昔からよく遊びに行ってたのよ。お風呂もその時。」

由「私と亜沙さんとお兄ちゃんと友哉君で入ってたんです。」

り「一緒に入ってたの!？」

亜「昔のことだよ、今は全然そんなのからね・・・」

赤面する亜沙にそれを見て笑うりと由香里。

由「やっぱり、りんさんすごいですね小5にしてはあるほうじゃないですか？」

り「もう何言ってるの由香里ちゃん。まあどこかの運動馬鹿よりはあると思うけど」

亜「う、うるさいわねえ、そのうち大きくなるんだから」

フ「人間の女の子ってよく喋るよね」

プ「うん、まあ私たちもよくおしゃべりするけどね」

チ「ほんとだよ、まったく」

・・・全「「「「お前は男風呂だろ」「」「」」

チ「ううええええええええええ」

く大広間く

達「あああゝ気持ちよかったー」

コ「腹へったよ達也」

達「そうだなあ、佐藤飯食べようぜ？」

り「うん、そうね。」

純「それだったらあっちにちょうどいいところがあったよ」

亜「じゃあ、そこで食べましょ。たくさんあるし」

俺たちはきずいてなかった。そのときあの闇の天使に監視されていたことを。

（食堂）

ホ「やはりおいしいですね。りんさんこれどうぞ。」

り「ありがとう、ホークモン・・・これおいしい。」

こうしたやり取りがパートナー同士で行われていた。しかし突然

純「き、消えた。食べ物がなくなってる！！」

突然子供たちの前からたくさんつんであった果物が一瞬にして消えてしまったのだ。

みんなが困惑しているなか・・・

？「はっはっは、子供たちよ始めましてだな。」

突然すがたをあらわしたのは背中に2枚の羽を持つ天使のようなデジモンだった。

？「わが名はダルクモン、このデジタルワールドを支配しようとするものだ。人間、お前たちは異端の存在だ消えてもらおうぞ！」

達「何だと！？いきなり出てきて何言ってるんだ」

プ「ダルクモンはいいデジモンなのに何でこんなことを？」

ダ「それは昔のことだ。われは目覚めたのだ闇と言う強大な力に。この力があれば弱肉強食のこの世界の頂点に立てるんだ。」

亜「よくわからないけどそんなことさせないわフローラモン進化よ。達也も」

達「おうっ」

コドラモン進化ーダイノモン
フローラモン進化ーートゲモン

ダ「ダイノブレス」

ト「チクチクバンバン」

成熟期2体の技がダルクモンに向かうがあっさりはじきかえさられ
ダイノモンたちにあたってしまった。

達「ダイノモーン、くそっ」

チ「純樹・俺も戦うよ。指示を出して。」

純「悪の敵に立ち向かう僕ら・・・まるでゲームみたいだよ、フフ
フフ・・・」

チ「純樹？これはゲームじゃないんだよ。僕たちは生きてる。傷ついたら怪我もするんだよ。」

純「そんなわけないだろ・・・行けチルノモン、アイスパールだ」

チ「純樹ッ・・・アイスパール」

しかしその攻撃はダルクモンにはじき返されチルノモンに襲い掛かる。

チ「うわあああー」

純「チルノモン次だー」

り「ちよっと加納君、無茶よ」

純「大丈夫だ、これはゲーム。すぐ治る」

そのとき達也が純樹の顔を勢いよく殴った。

由「お兄ちゃん！」

達「由香里黙ってる・・・純樹これはゲームじゃないんだ、チルノモンを見る。あんなに傷ついて動けなくなっている。俺たちだつて攻撃を受けたら傷つく。」

そういうと達也は自分の指の皮を噛み切った。

達「見ろ！こうしてちゃんと血が出る。俺たちはデジモンと一緒に戦ってるんだ。自分だけが傷つかないと思うな！」

純「・・・ぼっ僕はなんてことをチルノモンごめんね・・・」

チ「わかってくれればいいんだよ、純樹。」

ダ「仲間割れは終わったかな？そろそろ終わらせるぞ。」

純「チルノモン僕も一緒に戦うよ。」

純樹の目から涙が落ちた瞬間純樹のデジヴァイスが光った

チルノモン進化ーフリーズモン

純「チルノモンが・・・進化した！　よし、行けええフリーズモン」

フ「おおうー　プラチナブリザード」

ダ「くううっ」

亜「よし、ダルクモンがひるんだよ。トゲモン。」

ト「いくわよ、ココナッツパンチ」

ダ「ダイノフィンガー」

ダ「おのれえ、させるかー　ラ・ワープ」

全「「「「わあああああああ」」」」

達「こ、ここはどこだ？」

あたりは一面、真っ白

達「みんなああーーーーー」

真の敵！？闇に堕ちたダルクモン（後書き）

次回予告

いきなり雪一面の島へ飛ばされた達也！

そこであつたのは心優しいデジモンだった。

デジモンファイナリー第5話

「一人ぼっち！？」

フリーズモン

データ種 氷獣型 成熟期

チルノモンの成熟期。足が伸び毛深くなった

必殺技 プラチナブリザード 通常技 氷のかぎ爪

一人ぼっち!?

叫んでみたものの返事は返ってこず風が吹き、木から雪が落ちる音がただけであって。

「ううつ、さむっ・・・どこなんだよここ? しかもみんないないし、コドラモンさえいないとか。寂しッWW」

独り言を言ってもどうにもならず

「痛ッ、そういやさっき指切ったんだったよなあ。まあとりあえずここで独り言、言っても仕方ないからまず誰か探そう。」

そういつて達也はあるきだした。

「はあゝ。なにもみつからねゝ」

文句を言いながら崖の下を歩き続けた。しかしそのとき達也の上に崖から雪が降ってきた。

達「うあああああ」

ジ「ほおええゝゝ」

そのときすごく年寄りくさいデジモンが達也に降り注ぐ雪を粉碎した。

達「な、なんだ!! お前は?」

ジ「わしはジジモンじゃ。」

達「ジジモン？なんか見た目どうりの名前だな」

ジ「ウルサイワイ、わしはまだまだ現役じゃ！」

ジ「しかし今日はよくデジモンに会うもんだな」

達「いやいや、俺は人間だから、ってどんなデジモンにあったんだ？」

ジ「黒くて小さい恐竜みたいなのやっじゃ、今わしの家におるぞ。」

達「そこにつれてってくれないか？多分そいつおれのパートナーデジモンなんだ」

ジ「おお、わかった。・・・では行こう。」

く歩くこと10分

ジ「ここじゃよ。」

こじんまりとした家のドアが開く。

達「コドラモーン、よかったー。あえなかったらどうしようかと思っただぜ。」

コ「僕もだよ。達也が寂しくてしんじゃわないかと心配したよ。」

達「そんなわけないだろ。それよりほかのみんなはいないのか？」

コ「僕は知らないよ？ジジモンさんは？」

ジ「わしも知らんぞ。さっきこの島一周してきたが達也しか見つけとらんぞ」

達「一周ってここ結構広くなかったか？」

ジ「いやこの島はほかと比べれば小さいほうだぞ。」

達「ってことはあの島と違う島なの！？」

コ「そだよ。知らなかったの？」

達「どうすんだよーみんなと合流したいけど船とかないのか？」

ジ「船なんかないぞ。」達「そうか、どうしよう。」

？「それなら問題ないよ！」

聞きなれた声が家中に響く。

達「純樹！？」

コ「チルノモン！？」

純「達也君、会えたよかった。」

達「純樹お前いつここに？」

純「さっきついたばかりだよフリーズモンに乗ってきたんだ」

達「おお、じゃあすぐもとの島に戻ろうぜ。フリーズモンですぐにいい。」

コ&チ「それはだめ！」

達「なんでだよ。早く戻ろうぜ。」

コ「まだだめ、僕たち特訓するんだ。」

純「特訓!？」

チ「そう、このジジモンさんこそこのデジモンも生まれたらあこがれる究極体デジモンなんだ」

達「キュウキョクタイ?なんだそりゃ?」

コ「究極体は成長期、成熟期とだんだん進化してって一番上の位なんだ。だからすごく強いのだ。今度はあのダルクモンに負けないように特訓してもらうんだ。」

達「そっかーじゃあ早くやれよー。」

ジ「とういうことだからしばらくわしらは家を出るがお前らはそこにあるシチューでも食べとれ」

純「ありがとうございます。」

「2時間後」 海岸

達「じゃあ行くか。純樹頼むぞ。」

純「うん、チルノモン進化だ」

チルノモン進化ー フリーズモン

コ「じゃあありがとうございましたー ジジモンさん」

ジ「おおう元気だな」

純「良い人だったね。・・・良いデジモンだった。」

達「つかすぐく強いんならジジモンにダルクモン倒してもらえば良いんじゃない？」

コ「僕たちが倒すよ、せっかく特訓したんだし。」

達「じゃあ楽しみにしてるよ。」

続く

一人ぼっち!? (後書き)

次回予告

元の島に戻っていく達也と純樹。

一方りんはポロモンしか住んでない島にいた。

はたしてりんはみんなのところに帰ることができるのか？

デジモンフアイナリー第5話

「ポロモンを守れ。りんの覚悟」

ポロモンを守れ。りんの覚悟

「おねえちゃん早く遊びに行こうよ。お姉ちゃん。」

「ちょっと待っててね。もう少しで宿題終わるから」

「まてないよ早くおねえちゃん おねえちゃん。」

「うるさいわね集中できないでしょ黙ってて!!」

そう、このとき私は雄太を怒鳴ってしまったんだ。このせいで雄太は・・・

～1時間後～ 街

「雄太ーどこにいったのー雄太ー・・・あつ、いた雄太ーまってー」

雄太が横断歩道を渡っているときトラックが突っ込んできた。一瞬だった。私は一瞬で大切なものを失ってしまったのだ。

りんのせいではない。そう両親が言ってくれたが、私があの時怒鳴ったりしていなければ、宿題なんか後回しにしておけば雄太は助かったんだ。

ホ「りんさん、りんさん、起きてください。」り「うんうん、ホークモンここは？」

どうやら私は夢を見てしまったそうだ。とても悪い夢。思い出したくない、胸のおくにしまっておいたはずのもの。

ホ「ここは私の故郷です。私の進化前のポロモンの島です。たくさんポロモンが住んでいていいところですよ。」

リ「へえ、そうなんだ。でもみんなは？」

ホ「どうやら別のところに飛ばされたみたいです。まあこの島から抜け出す話はおいというてひとまず村へ行きましょう。ご馳走します。」

リ「そうね。さっきはとちゅうだったから、行きましょう。」

ポロモンの村

ポ「うわああ、ホークモンだ。ひさしぶり。」

ホ「久しぶりですね。みんな」

リ「みんなかわいいー」

ホ「そうでしょ、ではこっちに食事が用意されているそうです。」

リ「やったー、おいしそー、食べていいの？」

ホ（「やはりいつもリーダーになってみんなを引っ張って行ってるけど、年相応の女の子なんですわね」）

ホ「いいですよ。たくさん食べてください。」

り「おいしー、これカレー味のりんごじゃん。すごい。」

ファイル島 ダルクモンの城

ダ「ふんっ、まずは選ばれし子供のリーダーからやるとするか。バードラモンをつれて来い。」

バ「グワァー、グワァァァー」

ダ「お前に力を授けてやろう。 ラ・シエル」

するとバードラモの額に赤いマークがついた。

するといきなりバードラモンが暴れなくなり目も赤くなった。

ダ「行け、バードラモン。あの選ばれし子供を倒すんだ」

飛び立つバードラモン。そこには不気味に笑うダルクモンが一人立っていた

り「ぷはあー、おいしかったー餃子味のりんごもうどん味のりんごもいけるものね。」

ホ「そうでしょりんさん。これはこの島でも有名な特産物なんですよ。」

り「そうね、これなら私たちの世界でも大ヒット間違いなしよ。」

そんなこと言っているてもさっきの夢をまた思い出してしまう。何でいまさら？

まさかこっちに來て動揺してるの？

そのとき向こうで悲鳴が聞こえた

ポ「うああああー、誰か助けてー」

り「何があったの!？」

ホ「あれは・・・バードラモンです。バードラモンは良いデジモンなのに、なんで!」

り「それってまさかダルクモンがかかわってるの?」

ホ「わかりません、しかし今は戦わないとみんなが死んでしまいます。」

死ぬ!?! いや、わかってる。デジモンは生きてるんだから攻撃されてダメージを受けたら死ぬのは当たり前。でもさっきのゆめで・・・

ホ「りんさん、りんさんどうしたんですか?いつもの気合はどうしたんですか。あなたはもっと強いはず。」

私が強い? そんなはずない、だって雄太を・・・

り「私は強くなんかないよ、いつもみんなのまえではリーダーはし

ているけれどあれはみんながいるから、みんながいれば雄太のことは忘れられるから。自分の罪を紛らわせているからよ！」

ホ「りんさん……」

り「私は大切なものは何も守れない、一人だとこんなに弱いのだ。」

ホ「あなたは一人なんかじゃない!!」

り「えっ？」

ホ「あなたには私がいます。りんさんがひとりで守りきれないときは私が命を賭してでも守ってみせます。」

り「ホークモン……そうだね。ごめん。ありがとう。」

りんのデジヴァイスが光り輝く。

ホークモン進化——アキラモン

り「アキラモンいくよ、一緒にみんなを守ろう。」

ア「はい、いきますよおー」

バ「メテオウイング」

ア「そんなもの ブラストレーザー」

二対の技がぶつかり合い相殺した。激しい空中戦だ。

り「アキラモン、あのバードラモンのおでこにある赤いのって何？」

ア「はて？ あんなものはないはず」

り「そうよ！ あれスナイモンにもあったわ、あれを狙ってアキラモン。」

ア「わかりました。しっかりつかまってください。 グライドホーン」

バ「グワアアアアー」

アキラモンの技は見事バードラモンの額にあたりスナイモンの時と同じように退化していった。

ア「やりましたね、りんさん。」

り「うん、ありがとう。じゃあこの調子でみんなのところへ戻りましょ。」

続く

ポロモンを守れ。りんの覚悟（後書き）

次回予告

なぞの神殿がある島に、飛ばされた健士はあるデータを発見する。しかしそこにもダルクモンの魔の手が迫ってきていた。

デジモンフアイナリー第7話

「デジタルワールドの謎」

デジタルワールドの謎

健士とガンナモンが飛ばされた島は無人島であった。いや、無デジモン島である。

無デジモン島ではあるがその島自体が遺跡であったのだ！

健「すごいですよ、ガンナモン。ここならデジタルワールドのことがよくわかるかもしれません。」

ガ「こんなしماがあるとは・・・よかったですね、健士。」

健「じゃあもつとおくに行きましょう。」

ガ「うん」

く遺跡・中間く

ガ「やはり古いのか結構破損してますね。」

健「うん、あとわかったことですけどすべてデジモン語だ。解析するには時間がかかりそうだよ。」

ガ「健士こっちに何か絵のようなものが！」

そこに描かれていたものは、七体の悪魔のような姿をしたデジモンと天使のような姿をしたデジモンであった。

健「これは、なんなんでしょう？気になります」

ガ「七体の悪魔……そうだ！健士、七大魔王ですよ。」

健「七大魔王！？それはいったいなんですか？」

ガ「七大魔王……それは大昔にデジタルワールドを壊滅寸前に陥れた七体の魔王型デジモンです。その力は恐ろしく強く数多くの歴戦のデジモンがデータの塵にされていったと聞きます。」

健「それで、その後七大魔王はどうなったんですか？」

ガ「そこまでは……しかしおそらくロイヤルナイツが倒したんじゃないかと俺は思います。」

健「ロイヤルナイツ？」

ガ「ロイヤルナイツとはデジタルワールドを守護する聖騎士デジモンで6年前にも新たにコドラモンの親友であるデュークモンが加わりさらに強くなったと聞きます」

健「へえーやっぱりデジタルワールドはすごいですね。もっといろいろ知りたくなりました。」

ガ「健士は本当に知ることが好きですね。」

健「うん、知れば知るほどさらに興味がわいて来るんだ。」

くファイル島く　ダルクモンの城
ダ「あのバードラモンは失敗したか。……まあいい。次はあのガ

キだ。ハヌモンをつれて来い。」

ハ「キイイッイイイーーーー」

ダ「静まれ　ラ・シエル」

前回のバードラモン同様額に赤いマークが浮かび上がった。

ダ「さあ、行け。ラ・ワープ」

？「ダルクモン、調子はどうだ？」

突然部屋中になぞの声が聞こえた。それは明らかにダルクモンより上の存在からの言い方だった。

ダ「はい、今、選ばれし子供たちをばらばらにして一人ずつ倒す予定です。今も刺客を送ったところです。」

？「そうか、期待を裏切らないでくれよ」

ダ「はい。」

く島・中央く

健「あつ、あれは」

健士が見つけたのはコンセントのようなものであった。

ガ「これは？」

健「これは僕たちの世界にあるコンセントって言うものですよ。これに機械をつなげば電気を供給できるんです。」

そういうと健士は自分のパソコンを繋げた。その瞬間いきなり健士のパソコンに大量のデータが流れ込んで来た。

健「こっこれは、デジモン図鑑？　すごい！これにはいろんなデジモンのデータがはいってるんだ。インストールしなきゃ」
その時、

ハ「如意ボーン」

ガ「あれはハヌモン、なんでここを壊すようなことを！？」

健「あれを止めなきゃ、ここには貴重な歴史が！」

ガ「ハヌモンヤメロー　ダブルガン」

しかし、その攻撃は如意棒によってはじかれる。
そしてハヌモンの狙いが健士にかわった。

ハ「怒髪天」

健「うああああー」

ガ「健士ー」

ガンナモン進化ー！ー ガンガルモン

ガ「健士、大丈夫か？」

健「うん、よしっガンガルモン、プランEだ。」

そういうとガンガルモンはすばやくハヌモンの周りを回り始めた。

ハ「怒髪天」

ハヌモンが攻撃するがガンガルモンにかすりもしない。

健「いまだ、ガンガルモン。」

ガ「おうっツインキャノン」

ガンガルモンの砲台から連続で玉が発射されていった。そしてハヌモンの赤い模様も消え成長期のガブモンに戻り逃げていった。

ガ「さすが健士の作戦だ。」

健「いや、ガンナモンおかげだよ」

り「健士くーん、おーい」

健「りんさん、それにホークモン？」

ア「そうです、ホークモンですよ。」

り「このままフアイル島に戻るから乗ってー」

健「はーい、ガンナモンいこ」

ガ「はい健士」

続く

デジタルワールドの謎（後書き）

次回予告

「一人ぼっち!?」
2」

ガンガルモン

データ種 獣型 成熟期

ガンナモンの成熟期。ガルルモン並みのスピードをもちさらに背中
には砲台がある

必殺技 ツインキャノン 通常技 ギェルクロー

一人ぼっち!? 2

一人ぼっち!? 2

フアイル島 ダルクモンの城

ダ「こうも連続して進化してくるとは予想外だな・・・このままではあの方に見限られてしまう。それだけは避けねばならない、デジタルワールドを手中に収める力を手に入れるまでは。あの3体を呼べ、確実にしとめるぞ。」

そうしてつれられてきた3体のデジモンにまたラ・シエルを使い服従させ選ばれし子供のいる島へとばした。

ダ「これが終われば計画を次の段階に移すとするか・・・」

ダルクモンのまわりには不気味な闇が漂っていた。

亜「もおーみんなどこ行っただの、フローラモンも見つからないし。こんなときに襲われたらどうしよう。」

そうやってため息をつく亜沙だが、それが数時間後本当のことになる。

（2時間後）

亜「のどかわいたーもう疲れたー」

さすがの亜沙も2時間歩き続けて疲れたらしくかなり歩くスピードが遅くなってきた。
そのとき、

ジャ「ジャングルボーン」

亜「きゃっ なっなんなの」

襲ってきたのはジャングルモジャモンであった。もともとは非好戦的なのだがダルクモンの技で暴走しているのであった。

「やばい、フローラモンもいないのに」

ジャングルモジャモンがおってくるが亜沙の運動神経のおかげで何とか逃げていられているが
ここはジャングル、相手の方が有利なのでじきに追いつかれるだろう。

亜沙が走っていると突然何かにぶつかった。

亜「きゃっ、・・・フローラモン よかったやつと会えた。 フローラモンこっちに敵がって、ええー」

そう、フローラモンも追われていたのである。

ユ「ホーリーショット」

二人はユニモンの攻撃何とかよけ再び走りだす。

そして森をぬけたが・・・そこにはもう一体のデジモンがいた。

「そんな、囲まれた。とりあえず進化よ、フローラモン。」

フ「うん」

フローラモン進化ー トゲモン

ト「チクチクバンバン」

シェ「ハイドロプレッシャー」

トゲモンがシェルモンに対して必殺技を放つが相手も同様に技を放ち相殺させる。

その隙にジャングルモジャモンが迫って来る。

亜「トゲモン、危ない」

フ「プラチナブリザード」

ジャングルモジャモンがいつきに凍りつく。

亜「達也、加納君！」

純「大丈夫ですか、亜沙さん？」

達「助っ人参上だ。行くぞコドラモン」

コ「おうっ、」

コドラモン進化ー　　ダイノモン

成熟期3体がそろい数は同じ。

ダ「行くぞー」

ダイノモンはシェルモンの後ろに回りこみ持ち上げ投げ飛ばした。

シェ「ハイドロプレッシャー」

ダ「ダイノブレス」

二つの技がぶるかりあう

達「ダイノモン、今だ！」

ダ「ダイノフィンガー」

ぶつかる技をかいくりダイノモンは必殺技を決めてシェルモンを倒した。

ダイノモンがシェルモンを倒したと同時にこちらも勝負がついた。

純「フリーズモン飛べえー」

フ「氷のかぎ爪」

フリーズモンは飛び上がり空中のユニモンに技を決めた。

亜「トゲモーン、がんばって」

ト「うん、マッハジャブ」

ジャ「ジャングルパンチ」

トゲモンはジャングルモジャモンの技を紙一重でかわし顔面に技を決めた

達「亜沙ー！大丈夫か？」

亜「うん、ありがとう。早く友哉たちをさがさなきゃ」

純「そうだね、いこう。」

こうして3人はファイル島へ向かった。

続く

一人ぼっち!? 2 (後書き)

次回予告

ほかのメンバーが戻ろうとしている中、友哉と由香里はファイル島に残されていた。

そこにダルクモンの魔の手がふりかかる。

デジモンファイナリー 9話

「ピンチ! 小さな戦士たち」

ピンチ！小さな戦士たち

ピンチ！小さな戦士たち

子供たちがファイル島へ向かってるなか由香里にプロットモン、友哉にクダモンはファイル島に残されていた。

友「ここつてもといた島だよね？」

ク「ああ、そうだ。ファイル島のままだ。」

由「お兄ちゃんたちはどこにいったんだろ？」

プ「ほかの島かもしれないよ、由香里。」

由「そんなあ、じゃあもう会えないの！？」

友「大丈夫だよ、由香里ちゃんお姉ちゃんたちときっと会えるよ。」

由「うん、そうだね。」

友（「僕が強くななくちゃ、お姉ちゃんたちがいないときは僕が由香里ちゃんを守るんだ」）

友哉は男の子としてまだ小さいながら女の子は守らないといけないと亜沙から教えられていたので
気合を入れていた。しかし・・・

由「友哉君、お兄ちゃんたちがいない今は隠れることができるところを探そう。今の私たちじゃダルクモンに会ったらやられちゃうよ・

・」
「ごめん、由香里私たちが弱いから」

由「プロットモンたちだけのせいじゃないよ、私たちも弱いから・
・だから友哉君隠れよう」

友「う、うん」

そして4人は隠れる場所を探すのであったがそれをすべてダルクモンは見ていた。

くダルクモンの城く

ダ「無駄な悪あがきを・・さあ行くぞ、地獄の幕開けだ。」

由「ここが良いんじゃないかな？ねえ友哉君」

友「うん、良いんじゃないかな」

プ「やっぱり最近はお兄ちゃんの方が強いねえ」　ク「友哉も最初はよかったんだが今はもう由香里が主導権を握ってるな」

最近はお兄ちゃんより女子のほうがしっかりしていることが多くなってきているのはこの登場人物からして明らかである。

ゴ「エネルギーカノン」

そのとき4人が隠れようとしていた場所がいきなり吹き飛んだ。

由「きゃっ」

友「なんだ!!」

ダ「ここでおまえたちを始末する。」

プ&ク「ダルクモン!!」

4人の視線の先にはダルクモン、その両隣にはゴリモンとダークテ
イラノモン

由「逃げないと友哉君、私たちじゃ勝てっこないよ。」

友「由香里ちゃんが行って。ここは僕が足止めするよ」

由「だめだよ、3体もいるんだよ」

友「大丈夫だから、行って由香里!」

友哉が由香里のことを呼び捨てにし、よりいっそう強く言う。

由「わ、わかった。友哉君も早く逃げてね」

そういつて由香里とプロットモンは走り出した。

ク「大丈夫か、友哉?震えてるぞ」

友「・・・大丈夫！僕は男の子だ由香里ちゃんを守るんだ」

ダ「餓鬼がでしゃばると痛い目にあうぞ」

友（「僕がんばるよ、お姉ちゃん、お兄ちゃん」）

「クダモンいくよ！」

クダモン進化ー エンジェモン

ダ「進化したか・・・しかも私と同じ天使型デジモン。こいつらじゃ相手にならないか。」

エ「お前はもはや天使じゃない、闇に堕ちた悪魔だ。このエンジェモンが成敗する」。

こうして死闘がはじまった。

続く

ピンチ！小さな戦士たち（後書き）

次回予告

クダモンがエンジェモンとなりダルクモンと戦う中達也たちも到着した。しかしダルクモンの闇のパワーは強大であった。はたして達也たちはダルクモンに勝てることができるのか。

デジモンフアイナリー第10話

「決戦、そして決着」

決戦、そして決着

エンジェモンは光のパワーを集めて進化してるのでほかの成熟期デジモンより数段強いのだ。

しかしその分一度退化してしまえば次進化するにはほかのデジモンよりたくさんエネルギーをとらなければならない。

ダ「行け、ゴリモン、ダークティラノモン。」

ゴ「エネルギーカノン」

ゴリモンが遠距離から攻撃してきたがそれを簡単にホーリーロッドではじく。

ダ「アイアンテンブル」

ダークティラノモンが大きなたつめで格闘戦を挑んできた。

エンジェモンはホーリーロッドで防御しつつ攻撃するチャンスを狙っていた。

友「いまだよ、エンジェモン」

エ「ホーリーロッド」

エンジェモンの攻撃が見事に決まりダークティラノモンは吹っ飛ばされ壁に激突、気絶した。

ダル「ちっ、ゴリモン行け」

ゴリモンが体に似合わぬ速さで急接近してきた

ゴ「エネルギーカノン」

友「エンジエンモーン」

エ「そんなものきかない！ヘブンズナックル」

エンジエモンは自らの必殺技をゴリモンの右手の発射口に向けて放ちゴリモンのわざを押しつけさらに相手の巨体を吹き飛ばしたのだ。

友「すごいよエンジエモン。」

エ「ああ、だがダルクモンはあいつらとは全然パワーが違う。」

ダ「そうだ、私の力は強大だぞ・・・仲間が来たぞ、おちびさん。」

ア「ブラストレーザー」

アクイラモンの攻撃はあっさりかわされる。

亜「友哉ー」

友「お姉ちゃん、みんな。」

達「ダルクモン、お前のやってることはたくさんデジモンを傷つける、だからここで倒す。みんな、行くぞ。」

コドラモン進化ー ー ダイノモン
フローラモン進化ー ー トゲモン
ガンナモン進化ー ー ガンガルモン

これですでに進化している3体あわせて成熟期が6体そろった。

プ「由香里、私にもみんなと一緒に戦える力を頂戴。」

由「うん、戦おう。」

プロットモン進化ー ー テイルモン

健「よし、これで全員成熟期です。これなら勝てます」

ダ「よし、みんな行くぞ。 ダイノブレス」

ト「チクチクバンバン」

ガ「ツインキャノン」

ア「ブラストレーザー」

フ「プラチナブリザード」

テ「キャッツアイ」

エ「ヘブンズナックル」

7体の攻撃がいつせいにダルクモンに向かって放たれる。しかもその技は交じり合いさらに強力な技に進化した。しかし、その技はダルクモンに当たることはなかった。

ダ「バテーム・デ・アムール」

その瞬間大爆発がおこった。

全「わあああああー」

だ「はっはっはっは、圧倒的じゃないかこの力は。もはやだれも私に勝てん。」

達「くっそおー、強すぎる。俺たちじゃ勝てないのか。」

亜「まだだよ、達也。こんなところであきらめたら。」

り「そうだよ、みんなをまもらなくちゃ」

純「でもどうすれば」

エ「後は私に任せて」

友「エンジェモン!？」

エ「みんな私の杖にデジヴァイスを」

由「こう?」

7人の子供たちがエンジェモンの杖に向かってデジヴァイスを掲げた。するとデジヴァイスから光が発せられエンジェモンを包んでいく。

エンジェモン超進化ー！ー　ホーリーエンジェモン

ダル「なっ、進化しただと！」

健士は自分のパソコンにインストールしたデジモン図鑑に検索をかけた

健「あれはホーリーエンジェモン、完全体！？」

達「まだ、進化できたのか！」

ホ「ダルクモン、ここで貴様を排除する。」

ダル「ばかめ、たとえ私を倒せたとしても無理やり光の力で進化すれば命を失うぞ。」

友「そんな、ホーリーエンジェモン」

ホ「許してくれ、友哉。これで最後だダルクモン。　エクスキャリバー」

ホーリーエンジェモンの右腕のビームソードから斬撃が放たれダルクモンを一閃し、消滅させた。

全「やったあー！ー」

皆が喜ぶのも一瞬でホーリーエンジェモンも消えていくのであった。
そして落ちてきた羽が重なり合いひとつの卵が誕生した。

続く

決戦、そして決着（後書き）

次回予告

ダルクモンを倒した子供たちであつたが失つたものの悲しみが残つた。

しかしそのときなぞのデジモンからメッセージが送られてきた。

デジモンファイナリー第11話

「目指せ、新大陸」

目指せ、新大陸

友哉は卵を抱きしめなかった。

友「クダモンーン、やだよー」

亜「友哉・・・」

フ「友哉大丈夫だよ。卵は何日かで孵るから。」

友「え・・・そうなの？」

コ「うん。でも普通、元の記憶は残らないんだ」

達「そんな！」

ホ「でも大丈夫ですよ。友哉さんとクダモンの絆があればきっと記憶は残っていますって」

亜「だって友哉。そしたら早く卵を孵さないかね。」

友「うん、僕がんばるよ」

り「よし、じゃあこれからのこと決めましょう。」

純「佐藤さん、その前に食事にしませんか？」

健「皆も戦いで疲れていますしね」

り「そうね、じゃあ食料保存庫に行きましょう」

目指せ、新大陸

由「お兄ちゃん、これからどうするの？」

達「そうだなあ、ダルクモンも倒したんだから何もすることないよ
うな」

そのとき健士のパソコンにメールが届いた。

健「メール！誰だろう？ええっと、選ばれし子供たちへ？アグモン
ハカセより？みんなちよっとこれを見てください。」

亜「何？」

健「今僕のパソコンにメールが届きました。アグモンハカセって言
うデジモンから、読みますね。」

「選ばれし子供たち、ダルクモンを倒してくれてありがとうだぎゃ。
これから私のところへ来てほしいだぎゃ。」

友「選ばれし子供たちって僕たちのこと？」

達「多分そうだろうな。でもこいついったい何なんだよ。」

純「地図もついてるみたいだね。そこにいけば良いんでしょ」

り「でもこのデジモン信用していいの？」

ホ「大丈夫ですよ。アグモンハカセはデジタルワールドのことを何でも知っているデジモン。かなり有名です」

達「じゃあこれから何もすることないんだし、行ってみるか？」

由「でもそこって海をわたってかなりとおいところに行くんでしょ？チルノモンやホークモンじゃちよっときついよ」

純「イカダを作ってみるのはどう？」

亜「ちよっと古すぎない？」

健「いや、デジモンの手を借りればできると思いますよ。」

り「よし、じゃあ作りましょう。」

達「ダイノモン、まずその木を根元から折ってくれ」

ダ「わかったー」

こうしてイカダ作りが始まった。

ほとんどのデジモンが成熟期に進化して木を切ったりつなげたりしている。

（数時間後）

友「やったー完成だー」

健「思っていたより良いものができましたね。」

り「そうね、食料も一週間分積んだし問題ないわね。」

達「よし、出発だー」

こうして子供たちは新大陸へとたびだった。

く2時間後く

全「暇だー」

そう、ここは海の上何もするかとはできない。

健「航海は順調なんですけどね、後三日はかかりますしね」

達「そうなんだよなあ・・・ん？なんだあれは!？」

水面にはさめのような黒い影。だんだんこちらに迫ってくる。

達「皆、やばいぞ!！」

達也が声を上げたときにはデジモンがイカダにつつこんできてイカダは木っ端微塵になってしまった。

全「うあああああー」

つづく

次回予告

ピーピープー プーピーピープー
ピーププピーピー

デジモンフアイナリー 第12話
「ピーピープー」

ピーピープー

ピーピープー

達「うう、うん？皆大丈夫か？　ってこれはなんだ！」

達也達がいたのは海の中、しかし達也を大きな泡が包んでいた。

亜「なにこれ？どういうこと？」

マ「ピーピープー」

そこにいたのは小さなピンク色の天使みたいなデジモンがいた。

健「ええつと、マリンエジェモン。……究極体！？」

純「究極体？なにそれ」

チ「究極体ってのはね完全体の次の進化だよ。すごく強いよ。」

達「そんな強そうには見えないけどな」

り「でもかわいいよね」

友「でも助けられてありがとね。」

マ「ピーピープープー。　プピプピーププピ」

由「なんて言ったの？」

プ「どういたしましてだって。このまま大陸に連れて行ってくれるって」

全「やったあー」

（3時間後）

マリエンジェモンのおかげでかなり早く大陸に到着した。

由「すごく早くついたね」

達「ありがたいな、マリエンジェモン。」

マ「ピッププピー」

こうしてマリエンジェモンは海の彼方へ消えていった

友「いいデジモンだったね、お姉ちゃん」

亜「あれが仲間になれば私たち無敵じゃない？」

フ「私達がもっと強くなるもん」

ごめんごめんとフローラモンをなだめる亜沙であった。

り「健士君、それでアグモンハカセはどこにいるの？」

健「ええとひとまずまっすぐですね。結構距離ありますよ。」

達「よし、じゃあ行こうぜ」

続く

次回予告

とうとう大陸に到着した子供達
しかし、新たな敵が現れるのであった。

デジモンファイナリー第13話

「立ちほだかる闇の五闘士」

立ちほだかる闇の五闘士

達「もう三日も歩きつづけてるのにまだつかないのかよ」

健「まだ、結構距離ありますよ」

亜「達也、こんぐらいでへばるなんて情けないよ」

由「そうだよ、お兄ちゃん」

達「まだ大丈夫だけどさ、ずっと歩き続けるのもなあ」

り「わがまま言わない。食料もなんとか見つけたんだからいいじゃない。」

こうして選ばれし子供たちは永遠と歩き続けようとしていた。

くとある洞窟

「集まったか、それでは会議を始めよう」

「いよいよ、行動を始めるんだな。」

「やっと、戦えるのね。わくわくしちゃう。」

「君たちアスタモン様に失礼な口を利くなよ」

「いいんだよ、メルキューレモン。ではこれからの行動内容を話

すぞ。

お前たちほどの力があれば個人行動をとってもいい、もちろんペアをくむのもいい。だが最初は五人で行け。あいつらを恐怖のそこへ叩き落して来い。」

4人「はい！」

「ダスクモン、最初だけは行ってくれないか。これも計画のためだ。」
「わかった・・・」

友「ああー疲れたよーお姉ちゃんちょっと休もう。」

亜「そうね、そうしよ、りん。」

り「うん、じゃああの岩陰で休みましょう」

達「なあ、コドラモンって俺を待ってたっていったよな？それってどれくらい待ってたの？」

コ「うんーとね、5年ぐらいだよ。五年前に生まれてしばらくしてギルモンと仲良くなって遊んでたんだよ。でも2年前にロイヤルナイツになったからもうあえなくなったの。」

達「ロイヤルナイツって何？」

プ「ロイヤルナイツってのはデジタルワールドを守護する13体の

聖騎士型デジモンだよ。デジタルワールド最強って言われててこの世界の危機のときに現れるんだよ。」

由「へえ、そんなすごいデジモンの中にコドラモンのお友達がいるんだー。すごいね」

達「よし、じゃあ俺たちも強くななくちゃな。そのギルモンに負けないように。」

ア「ブロッケイドシード」

いきなり爆発が起きた。

純「な、何!？」

健「あそこに何かいます!」

そこには五体のデジモンが立っていた。そこからはまがましい強大な力がふきだしてきた。

由「なにこれ・・・怖い」

メ「我々は伝説の十闘士のうちの5人だ。今日はちょっと遊びに来てやったぞ。」

達「くそ、みんな進化だ!」

コドラモン進化ーダイノモン

コドラモンたちが進化した。だが進化することのできたのはコドラモンだけであった。

亜「なんで進化できないの!?!」

フ「ごめん亜沙、疲れがたまってる力がでないんだ。」

達「くそっ、ダイノモン俺たちだけでも行くぞ!」

ダ「おうっ、ダイノブレス」

ダイノモンは5人に向かって炎の塊をふきだした。しかし、

メ「ジェネラスミラー」

メルキュールモンの鏡に吸い込まれていきさらに大きくなってダイノモンに襲い掛かった。

達「ダイノモン、近距離で行くぞ」

そう言い放った瞬間、

グ「グロットモンスライドエボリューション ギガスモン」

健「進化した!?!」

ギ「ハリカーンボンバー」

ダ「ぐわああー」

ダイノモンが吹き飛ばされ達也の目の前に倒れこむ。

ラ「仲間のほうも気にしたほうが良いわよ」

達「みんな！！（くそ、進化できればあいつらにも勝てるのに。）
ダイノモン進化しろー」

そのとき達也のデジヴァイスから黒い光が出た。

ダイノモン超進化ー！ メガロダイノモン

達「よしっ、いけえメガロダイノモン」

しかしメガロダイノモンの様子がおかしかった。体の周りにはあのときのダルクモンのような闇のパワーをまとっている。

ア「シンカシタカラッテカテルトオモウナ。マシンガンダンス」

アルボロモンが攻撃しようとした瞬間

メ「ダイノインパクト」

5 闘士の方に強力な攻撃が放たれたのであった。

続く

次回予告

暴走するメガロダイノモン

そこに一体の究極体デジモンが現れる

デジモンファイナリー第14話

「完全体への道」

完全体への道

完全体への道

達「・・・・・・・・メガロ・ダイノモン・・・」

メガロダイノモンの目は赤く光闇のオーラをまとっている。その姿はまさに邪竜であった。

健「まただ、デジモン図鑑にデータがない。コドラモンの進化デジモンはなんでのってないんだ。」

ラ「何なのよ、あいつ。この闇の力アスタモン様以上、やばいんじゃないの」

メル「くっ、これほどとは。」

ギ「こんなやつ、ハリケンボンバー」

メ「メガロセイバー」

メガロダイノモンは両腕についているビームのソードでギガスモンを叩きとばす。

メル「むやみに突っ込むなギガスモン」

ダス「お前たちはさがれ、俺がやる。」

ラ「生意気よ、いくらあんたでもあの闇の力には勝てないでしょ。」

メアガロダイノモンの剣とダスクモンの剣がぶつかり合い激しい波動が発生する。

亜「なんなの、このめっちゃくちゃな戦い。フローラモンまだ進化できないの？あれをとめなくちゃ」

フ「ごめん亜沙、まだ無理みたい。」

「その勝負、待たれよ」

その声の方向には真紅のマント羽織った騎士がいた。

デュ「我が名はデュークモン、このデジタルワールドを守護するロイヤルナイツの一員だ。」

メル「ロイヤルナイツだと！！分が悪すぎるここは退くぞ」

五闘士が逃げていった。

由「やった、何とか助かったね。でも、デュークモンって・・・」

デュ「コドラモン・・・ホーリーヒール」

メガロダイノモンの周りに光が集まる

メ「ぐうおおおー」

メガロダイノモンが退化していく。

達「こどもーん」

そこにはコドラモンではなく小さくて丸いデジモンがいた。

デュ「力を使いすぎて幼年期にまで戻ってしまったのだろう。安心しろ命に別状はない。」

達「ごめんな、俺のせいでこんなに傷ついて」

亜「達也・・・」

デュ「ひとまずアグモンハカセのところに移るぞ」

り「デジモンハカセ！？場所を知ってるの？」

デュ「ああ、わたしはアグモンハカセに依頼されてここまで来たのだ。一瞬でとぶぞ」

そしてデュークモンと子供たちはアグモンハカセのところに移動した。

ア「よく来てくれただぎゃ、選ばれ士子供たち」

健「あなたがアグモンハカセですね。どうして僕たちを呼んだんですか」

ア「よく聞いてくれただぎゃ、今このデジタルワールドには危機が迫っている。さっきの闇の五闘士を従えているデジモン、アスタモン」

純「アスタモン・・・」

ア「そのアスタモンがこのデジタルワールドを壊そうとしている」

友「何のためにそんなことを!？」

ア「目的はわからないだぎゃ、でも倒さなければいけないだぎゃ。だから君たちをよんだだぎゃ。」

り「やるしかないわね、ここまで来たら。」

由「でも私たちも完全体に進化しないとあのデジモンたちにも勝てないよ」

達「そうだ、なんで・・・メガロダイノモンは暴走してしまったんだ!」

ア「それはな普通デジモンは長いあいだ戦い抜いてこそ進化できるんだ。いくらパートナーの力があっても完全体への進化は大変だぎゃ。」

達「じゃあどうすれば?」ア「完全体に進化するにはリングが必要

なんじゃ。」

健「リングとは何ですか？」

ア「リングは太古に作られた宝具ののひとつで進化の力を秘めていると言われている。それを使えばちゃんとし完全体に進化できるはずだぎゃ。」

達「よし、じゃあそれを探そう。もうコドラモンを傷つけない」

全「おううっ」

続く

次回予告

リングを探すべく旅に出る子供たちはたして見つけることができるのか？

デジモンファイナリー第15話

「リングを探せ」

リングを探せ

ア「まあひとまずやすむだぎゃ。風呂も食事も用意してあるだぎゃ。」

リ「そうね、みんな疲れがたまってるし行きましょう」

（1時間後）

健「デュークモンさん少し話を聞いていいですか？」

デュ「ああ、構わないぞ」

健「あなたは前はギルモンだったんでしょ？なのに今は究極体、どうやってそんなに早く進化できたんですか？」

達「俺も気になる、さっきアグモンハカセがかなり長い間特訓しないと進化できないって・・・」

デュ「私は特別だ。私にもともとタイマーがいたんだ。」 亜「そうなの！？」

デュ「私はおそらく君たちとは違う地球に住んでいたタカトが考えたデジモンなんだ。そしてタカトと遊び冒険して戦った。そのときに私は進化した。究極体になるときはタカトと一緒に進化した。」

純「一緒についてデジモンと人間が！？」

デュ「そう、タカトと一緒に戦ってくれたから進化できた・・・し

かし出会いがあれば別れもある。ここと違うデジタルワールドに強制的に戻されたんだ。」

由「そんな・・・ひどい」

デュ「戻ってきて数ヶ月過ぎるとこちらのデジタルワールドに召還されコドラモンとあったんだ。コドラモンも私と同じ・・・君が考えたんだろ？達也」

達「お、俺が！！・・・そうだ俺が2年生のとき、アニメのキャラクターに憧れて考えたんだ。」

デュ「そのおかげでコドラモンと仲良くなったんだ。まあそのうちロイヤルナイツになり今にいたるのだ。だからコドラモンは大切にしてくれ」

達「それは当たり前だ。もうこんなことになってほしくない。」

コ「たつや〜おはよ」

達「コドラモン、よかったあ」

コ「あつ、デュークモン久しぶりだね」

デュ「久しいな、コドラモン」

デュ「すまないが、私はもう戻らなければいけない。しかも今回の件にはわが主の命なければ動けない」

友「そっかあ、デュークモンがいれば頼もしいのにな」

ク「私たちががんばる、心配ない。」

デュ「では、またな。」

達「ああ、ありがとうな」

達「俺たちもそろそろ行こうぜ、リングを探しに。」

亜「うん。行きましょう」

グ「へっへっへ 今度はあの時のようにはいかないぜ」

ア「まずはここから東にある工場行ってくるだぎゃ。そこにリングがあるといわれてるだぎゃ」

り「じゃあ行きましょう」

続く

次回予告

リングがあるという工場に向かった子供たち。
グロットモンの罠で亜沙が人質に取られてしまう。

達也の勇気

り「ここがそうね」

達「よし、速く行こう。」

由「お兄ちゃんはりきってるね」

達「当たり前だよ、もうコドラモンを傷つけたくないから。」

コ「ありがとう達也、僕もがんばるよ。」

（工場内）

純「ここにある機械は誰かが動かしてるんじゃないんだね。」

チ「たぶん全部全自動なんだよ。」

純「ふゝんそっか」

子供たちが歩いているといきなり天井のスピーカーから声が流れてくる。

グ「へっへっへ、選ばれし子供たち我が名は土の闘士グロットモンだ。今この工場にはたくさん罠が張り巡らされてある。さあゝてここから逃げ出せるかな？ゲームスタートだ！！」

その声と同時に子供たちのほうにナイフのような刃物がとんでくる

亜「皆ここからだよ、あぶないよ」

達「だめだよ、リングを見つけるまではここから出ない。行くよコドラモン」

コ「うん」

り「まって保科君、危ないよ」

由「そうだよお兄ちゃん、行くなら皆でいこう。」

達「じゃあ早く行くぞ。」

子供たちはナイフをよけながら奥に進んでいった。

亜（「なんか達也かわったな。前と違うこんなんじゃないのに・・・」）

友「お姉ちゃんどうしたの？いつもなら先頭を突っ走っていくのに・・・。」

亜「ううん、なんでもないよ。さっさと行こ、送れちゃう。」

健「見てください、あそこに扉が。」

達「よし、いくぞ。リングがあるかもしれない」

まるで誘い込むように扉が開く。そのとき亜沙だけの周りにビーム状の柵が発生した。

亜「きゃっ、何これ！？フローラモン」

フ「亜沙っ、アレルギーシャワー」

しかしフローラモンの攻撃は柵にはじかれた。

り「そんな！！亜沙」

純「達也君、あそこにリングが」

突然扉が開きそこからたくさんのタンクドラモンが入ってきた。そしてまた放送が始まる。

グ「さあどうする子供たち？仲間をとるかリングをとるかちなみにこいつらは完全体だぜ」

亜「みんなリングをとって早く逃げて。完全体のこいつらには敵いっこないよ。」

友「おねえーちゃん」

純「ここはやっぱり逃げたほうが良いんじゃない？」

ガ「そうだ、数でもあっちのほうが多いし」

その間にコドラモンがリングを取ってきていた。

コ「達也、リングー」

達「くそっ亜沙ー」

亜沙がつかまりパニックッていてコドラモンの声も耳に届かない。

り「保科君がこれじゃもうだめねみんな逃げましょう。亜沙ごめん絶対助けに来るからー」

達「亜沙ー亜沙ー」

コ「達也逃げるよ。フローラモンも」

フローラモンもパートナーが捕まっていてパニックになっている。しかし二人とも皆に抑えられつれられていった。

く工場の外く

友「おねえちゃん」

友哉は先ほどから延々と泣いていた。

達「くそっ、亜沙 俺のせいで」

由「お兄ちゃんのせいじゃないよ・・・」

く達也回想く

それは達也が5歳のころ幼稚園で・・・

友達A「達也の弱虫ー」

友達B「いつも泣いてばっかじゃん」

そこには友達にいじめられ泣いている達也がいた。

亜「こらー達也をいじめるなー」

友A「わあー亜沙だー逃げろー」

友B「逃げろー」

達「ごめん、亜沙いつも・・・」

亜「いいんだよ、達也。」

ー回想終了ー

達（「そうだいつも俺は亜沙に守ってもらっていた。今度は俺が助けるんだ。」）

達「みんな俺行くよ。みんなは待っていてくれ。」

由「無茶だよお兄ちゃん。リングを取ったからって絶対進化できるわけじゃないんだし。」

健「そうですよ。あんな多くのデジモンに勝てるわけじゃないですよ。」

達「大丈夫だ。行くぞコドラモン。」

コ「うん」

（工場内）

グ「一人で来るとはいい度胸だな。」

亜「達也ー来ちゃだめー」

達（「足が震える・・・だめだ逃げちゃだめだ。」）

達「俺はもう逃げない。進化だコドラモン」

その瞬間デジヴァイスとともにリングからも光が放たれる。

コドラモンワープ進化ーーー メガロダイノモン

姿は前と変わらない。しかし以前とは違い闇のオーラはなかった。

グ「くっ進化ししやがった。うん？ いや前の感じがないな。これなら・・・」

メ「た・・・つや・・・たつや」

達「俺がわかるんだなメガロダイナモン。よしいくぞまずはタンクドラモンだ。」

タンク「ストライバーキャノン」

メ「うおーおーおーダイノインパクト」

メガロダイノモンの口から放たれた衝撃波は達也たちに降り注がれ

るミサイルがいつせいに無効化しタンクドラモンをも吹き飛ばした。

グ「完全体20体が一瞬で・・・やるなースネークアイブレイク」

メ「メガロセイバー」

2体の技がぶつかり合う。

達「いっけーーーーー」

メ「ウオーーーーー」

メガロダイノモンが押し勝ちグロットモンの体を切り裂く。

グ「なんだとーこのグロットモン様がー」

グロットモンはデータの塵となって消えていき同時に亜沙の周りの柵も消えた。

亜「達也ーありがとう。かつこよかったよ」

達「いや、がんばったのはメガロダイノモンだよ。まあこれであるときの借りはかえたからな。」

亜「あのときって？」

達「幼稚園のときよく助けてくれただろ」

少し赤くなりながらつぶやく

亜「まだそんなこと覚えてたの！別にあんなの良いのに？」

達「うっ、うるさい、早く戻るぞ。」

続く

次回予告

見事進化に成功したコドラモン。

そしてほかの子供たちもリングを捜すために別行動するのだった。

デジモンフアイナリー第17話

「それぞれの道」

それぞれの道

ア「よくやっただぎゃ、これでやっとアスタモンと戦えるようになっただぎゃ。」

達「本当にやったな、コドラモン」

コ「うん、やったやったー」

亜「私たちも早くリング見つけないとね」

フ「私たちも早く進化できると良いな」

パンツ

友「あっ卵が割れた。」

プ「僕の名前はプットモンだよ。久しぶりだね友哉。」

り「じゃあさっさと次のリングを探しに行きましょう。」

健「ほかのリングはどこにあるんですか？」

ア「ほかのリングはないろんなところにあってな別行動したほうがいいだぎゃ」

由「でもそれって危険じゃない？残りの4闘士に遭遇したらやられちゃうよ。」

プ「大丈夫だよ由香里。私を守るから。」

純「僕たちにはパートナーがついてるから大丈夫だよ。行こう」

チ「なんか変わったよね純樹って」

純「そうかなあ？」

チ「うん、そうだよ」

亜「じゃあやつぱり達也は友哉のことお願いね」

達「なんで？いつもみたいに俺と由香里、亜沙と友哉で良いんじゃないの？」

亜「プットモンはまだ幼年期だしコドラモンは完全体に進化できるでしょ。だから友哉をお願いね」

達「ああ、わかったよ。じゃあゆかりを「私は大丈夫。一人で行けるよ」

達「いや、でもさ・・・」

亜「達也、由香里ちゃんもこういつてるし、プロットモンもいるんだから大丈夫よ。いい加減シスコンを卒業しなさい」

コ「しすこん？」

達「シスコンじゃないよ！！まあそうだな由香里気をつけろよ」

り「じゃあ食料も持ったことだし出発しましょう。」

ア「気を付けるんだぎゃ、みんな。」

達「じゃあ行くか。友哉」

友「うん、お兄ちゃん」

ア「健士、これをインストールしとくだぎゃ」

健「これは何ですか？」

ア「これはコドラモンとその進化デジモンについてまとめておいたものじゃ。」

健「ありがとうございます。じゃあ行こうガンナモン」

続く

それぞれの道（後書き）

次回予告

それぞれ旅たつ子供たち。

リングを見つける前の亜沙の前にらーナモンが立ちはだかる
デジモンファイナリー第18話

「水の闘士ラーナモン。

進化せよリリモン」

水の闘士ラーナモン 進化せよリリモン

「じゃあな、気をつけろよ由香里」

「うん、まかせて」

「私もいるんだから大丈夫だよ、達也」

由香里とプロットモンは達也たちと別れ神殿のほうへ歩いていった。そしてまた達也、コドラモン、亜沙、フローラモンは歩き続けた。

（30分後）

「私もそろそろね。じゃあね友哉。 達也、友哉を頼んだよ」

二人は亜沙の言葉に勢いよく答え元気よく歩き出していった。

「亜沙、友哉のこと心配？」

「ううん、達也がいるから心配ないよ。」

「へえ、そんなに達也のこと信じてるんだ」

フローラモンがいやみを言うようにつぶやくと亜沙は慌てたように訂正する。

「ちっちゃがうよ。達也はコドラモンを完全体に進化させることができるからよ。べっ別に深い意味はないんだからね」

「まあいつか行こうよ亜沙」

ふたりが到着したのは花が一面に咲き誇っておりその中央には小さい湖があった。

「ここよね・・・リングはどこなの？」

「まあ探してみよ。花の中に入ったりして」

「ああーーーないよーー」

バサーン

いきなり湖からみずしぶきが飛ぶ

「ここにいたのね。選ばれし子供。知ってると思うけど私はデジタルワールドのアイドル、ラーナモンよ」

「ラーナモン！！まだリングを見つけてないのに」

「ラーナモン、あなたたちの目的は何なの？」

「目的？そんなの言うわけじゃないの、ばっかじゃないの。どうせすぐあなたたちはもう自分の世界に帰れないんだから」

「何でそんなことがわかるのよ!？」

「ここであなたたちが死ぬからよ。一気にしとめてあげる　ラーナモン　スライドエボリューション　カルマールモン」

ラーナモンはスライドエボリューションをして巨大なイカのようなデジモンになった

「なにあれ、気持ち悪。でもここは進化しかなさそうね、フローラモン」

そういわれ進化したトゲモン。そしてにらみ合うカルマールモン。少しの間の沈黙を破ったのはカルマールモンであった。

「成熟期でこの私に勝てると思ってるの　ネールコロン」

間一髪でよけるトゲモンであったがその攻撃が落ちた場所は溶けていった

「そんな、これ毒なの？トゲモンその攻撃は絶対あたっちゃだめだよ」

「うんわかってる、チクチクバンバン」

「そんなものきかないわよ　タイタニックチャージ」

カルマールモンは自らの体を回転してトゲモンと攻撃をはじきそのままトゲモンに回転してドリルになった部分をぶつける

「わああー　亜沙にげて、こいつ強すぎるよ」

「トゲモンをおいてくなんてできないよ」

「うるさい小娘ね、くらいなさい」

カルマールモンの腕がのびに亜沙に迫る。何とかよけた亜沙だがそのとき亜沙はまわりが見えておらずそのまま湖の中に入ってしまう。

「亜沙――」

亜沙を助けるためにトゲモンも自ら飛べこんでいく。

「ふん、こんなことで終わってしまうなんて面白くないわね」

そう、その湖は回りに咲くきれいな花とまったく違い「死の沼」と呼ばれており水中系デジモンしか泳ぐことができず一般のデジモンが入れば一生出てくることができないのである。

（「なんで、およげないの？私ここで死んじゃうの？そんなのやだよ、やりたいことだったたくさんあるしフローラモンとも会ったばかりなのに・・・みんな・・・友哉・・・フローラモン・・・
・・・たつや」

そのとき海底から亜沙のもとに光が近づいてくる。それは達也が持っていたものと同じようなものだった。

「亜沙――亜沙――」

「トゲモン、行くよ。進化ー」

カルマラーモンがあっさりと終わった戦いにうんざりしているといきなり湖から光が発せられた。
そこから亜沙とトゲモンが出てきた。

トゲモン超進化ーリリモン

トゲモンが光に包まれた瞬間そこから小さな妖精が現れた。

「進化しただー まあ進化したぐらいで勝てると思わないことね。私の新技タイタニックチャージ&ネールコロ」

それは先ほどの技を組み合わせただけの技なのだが回りながら放たれているのでいろんなところに飛び回避はほぼ不可能である。
まわりの花は毒に侵され、かれていってしまう。リリモンも亜沙の盾になり自ら攻撃に当たっていた。

「リリモンーだめよ」

「大丈夫、亜沙 テンプレーション」

リリモンは空中に飛び上がり空気中に花粉のようなものをばら撒いた。

その瞬間リリモンの体についたネールコロンは消えていき、まわり

のかれた花がよみがえっていく。

「これでおわりよカルマーラモン。フラウカノン」

リリモンから放たれた攻撃がカルマーラモンを貫き消滅させる。

「このわたしがあーあすたもんさまー」

「やったねリリモン」

「うん、じゃあいきましょう」

水の闘士ラーナモン 進化せよリリモン（後書き）

次回予告

リングを探してゲコモンの村にやってきた健士とガンナモン

しかしそこに五闘士の一人のメルキューレモンの策略が潜んでいた。
デジモンファイナリー大19話

「命の大切さ、敵を狙い打て」

命の大切さ、敵を狙い打て

健士とガンナモンがアグモン博士に言われてやってきたのはゲコモンがすんでいる村であった。

その村はいたって平和でいつも長老の指揮のもと元気に合唱していた。

「ここにりんぐがあるんですね」

「ええ・・・とりあえずあのゲコモンたちに聞いてみましょう。」

二人は歌っている最中のゲコモンたちに聞いてみる

「すみません、ここらへんにリングというモンがあるときいたんですが、どこにあるか知りませんか？」

「リングゲコか？　ううゝん聞いた事ないゲコよ。みんなは知らないゲコか？」

ゲコモンたちが互いに顔を見合わせ話し合ってるようだがなかなか意見が出ない。

「どうやらみんな知らないゲコだ。すまないの」

お札をいい歩き出そうとした二人に・・・「ちょっと待つゲコ」
集団の中から一人のゲコモンが手をあげ叫ぶ

「そのリングかわからないけど東のほうの峡谷の下の方に宝石のようなかやぐらがあったのを見たゲコ」

「だがあのきょうく「よし、行きましようガンナモン。」

二人は長老の話を聞かずに走って行ってしまった。

「それにしてもなんで健士はそんなにリングを追い求めているんですか？たしかにリングがあれば完全対に進化できてコドラモンみたいに五闘士を倒せるかもしれないですけどそんなに・・・」

「僕が考えるにはリングにはまだ隠された秘密があると思うんです。それを知りたいんですよ。」

「それもいいですがあまり危険なことはいしなで下さいね」

「ここがゲコモンが言ってた峡谷か。結構深いですね。」

「あつ、たしかにあそこにリングらしきものがあります」

そういったとたん健士はすぐに峡谷に入ってしまった。

「まって健士、私が行きますよ」

「大丈夫だよ、待ってて」

健士は簡単にリングのところまで行ってしまふ。

「やっぱりリングですよ。ガンナモン」

健士がリングをつかんだ瞬間足場が崩れる。

「けんしっ」

ガンナモンは咄嗟に銃を抜き、からまっていた縄の片方をうちぬきその縄を健士の元に届ける。

健士は必死にその縄にしがみつきガンナモンに引き上げてもらった。

「ありがとうガンナモン、助かったよ」

「あなたは無茶をしすぎです、自分の命をもっと大切にしてください。」

二人が村に戻ったとき、むらは荒れ果てていた。

「これは何が・・・」

「やっと来ましたか。選ばれし子ども。待ちくたびれましたよ。我が名は鋼のメルキューレモン」

「五闘士かッ 何でこんなことを!？」

「暇だったからだ。他に何もないさ」

「くっ許せない、ガンナモン」

デジヴァイスから光が出てガンナモンがガンがルモンに進化した。

「ツインキャノン」

高速で動くガンガルモンからキャノンが発射された。
しかしその攻撃はメルキューレモンのたてに吸い込まれすぐに発射された。

「ガンガルモン・・・進化できるのか」

「まかせろ、健士」

ガンガルモン超進化ーーケルドガンナモン

「完全体に進化したか・・・少し厄介だな。フンッ」

メルキューレモンが指をならした瞬間いままでそこにはいなかった
ゲコモンが現れた。

「これは本物だぞ。さあどうする。」

「ケルドガンナモン撃っちゃダメだ。もしあたったらゲコモンが・・・」

「任せて健士、スナイプスコープ」

ケルドガンナモンの機械化された目には見抜けぬものではなく現実か
否かを見極めることができるのだ

「健士、大丈夫だ。あれはすべてにせもの。メルキューレモンの力

で作られた幻だ。」

小声でつぶやく

「でも大技を使えばゲコモンの街を壊してしまう。」

「まかせて、俺を信じて。」

「……わかった一気に決めてくれ」

「何をちょこまかと話しているんだ。君たちにはこいつらを撃てまい」

「それが本物でしたらね」

「狙い打つぜ、全力全開ディバインバスターー」

「なっなんだとー」

圧倒的な火力にメルキューレモンは一瞬でデータのチリとかした。

命の大切さ、敵を狙い打て（後書き）

次回予告

リングをもとめりんとホークモンは天空の島へ向かう
そこは鳥系デジモンの樂園だった。

デジモンファイナリー第20話

「鳥の樂園！？飛翔せよガルダモン」

ケルドガンナモン

データ種 機獣型 完全体

ガンガルモンが2足歩行になり足と手が機械で強化されている背中
には長距離ライフル、腰に短銃を持っている。

手と足が強化されているので脚力が上がっており驚異的なジャンプ
力がある。

必殺技ディバインバスター 通常技スナイプスコープ サイドガン

鳥の樂園！？飛翔せよガルダモン

「リングのあるところってここらへんじゃないの？あたり一面砂漠じゃない」

「りんさん、おそらくあそこでしょう。」

ホークモンの指差した先には空に浮かぶ巨大な物体があった。

「あれってやっぱり島なの！？」

「おそらくそうでしょう。木らしきものが見えますし。」

「じゃあ、行きますか。ホークモン進化お願い」

「はい、おまかせを」

ホークモンはアクイラモンに進化し、りんを乗せ飛び立った。

鳥の樂園！？飛翔せよガルダモン

「やっぱり、信じれないよね。島が浮いてるなんて。」

「ええ、私も見るのは初めてですし。」

「まあ実際その島にいるんだから、何もいえないけどね。とにかくリングを探しましょう」

二人が歩いてると向こうのほうに土煙が上がってるのが見える。しかもそれがこちらに近づいてくるのだ。

「な、なんなのあれ!!」

「あれはキウイモンです。群れてこっちにきます。敵意はないと思いますからひとまずよけましょう。」

二人が草陰に入った数秒後にキウイモンの群れが通り過ぎていった。

「はあくなんなのよーいきなりー」

とその瞬間

「コカーー」

コカトリモンがいきなりりんたちの後ろから現れそのまま向こうに走り去っていった。

「もおーーなによここーー」

「りんさん落ち着いてください。おそらくここは鳥系デジモンの住む島です。昔、聞いたことがあるんです。天空に浮かぶ島があり、そこはすべての鳥系デジモンの始まりの島だと。」

「じゃあホークモンもここから来たの?」

「ええ、おそらくそうでしょう。あまり記憶にありませんが。まあこんなことはなしていても仕方ないですし早く探しましょう。」

（5分後）

「なんかあっさり見つかったね」

「はい、まあラッキーですね。では戻しましょう。」

そのとき真南の方角で木々が揺れデジモンがとびたつ。

「行ってみましょう、りんさん」

「えっ、ちょっと待ってよ」

「アルボロモン スライドエボリューション ペタルドラモン
うおー腹減ったぞ」

「あれは五闘士の・・・たしか木の闘士。何でこんなところに」

「うおーやっと思つたぞ選ばれし子供！。すぐ片付けてやる」

「りんさん、戦いましょう。進化です」

「なんでいきなり好戦的になるのよ。まあ倒さなきゃ私たちがやられるみたいだししょうがない」

「ホークモン 進化ーーーーー アクイラモン」

「行きますよーーーーー グライドホーン」

アクイラモンはペタルドラモンに突撃したが尻尾ではじき返される。

「やっぱり強いわね」

「くそーーーー やっぱりコドラモンみたいに完全体に進化しなければあーーーーいけませんねーーーー」

（「さっきからなんであんなにテンション高いの？こんな危機的状态なのにまるつきり緊張感が沸かないじゃない」）

「はらへったぞーーーー」

と言いながらペタルドラモンは周りの木々を食らい始めた。

ペタルドラモンは木の闘士である。なので木を食べれば強力になるのだ。

そして今も木を食べながら巨大化しているのだ。

「まだまだーーーーブラストレザー」

「腹いっぱい俺には効かないぞーーーーリーフサイクロン」

ペタルドラモンから発せられる攻撃にアクイラモンは吹き飛ばされ退化してしまう。

「ホークモーーーーン」

「すみません、やはり私には・・・」

「ごめん、私の力が足りないから進化させてあげれないんだよね。もう誰かが目の前からいなくなるのは見たくないよ」

そのときデジヴァイスとリングが光る。

ホークモン超進化ーーー ガルダモン

「大丈夫ですよ、りんさん。わたしはどこにもいきませんから」

「完全体に進化したからって木の闘士の俺様には勝てやしないぞ」
そう、そこはあたり一面に木がありペタルドラモンは断然有利なのである。

「それでも私は故郷とりんさんを守りたい シャドーウィング」

ガルダモンの攻撃がペタルドラモンにぶつかる。しかしペタルドラモンに与えた傷はすぐに修復された

「そんな！！完全体になっても倒せないなんて。」

「だからむりだといっているだろ」

「くそっ、わたしにはみんなをすくえないのか・・・」

「おぬしの声よく聞こえたぞ」

りんの後ろのほうがり輝く

そこには四枚の翼を持ち両足には神聖の証であるホーリーリングがついている黄金に輝くデジモンがいた。

「われの名前はハウオウモン。この島をすべるデジモンなり。ガルダモン、お主の故郷と主への思いは私にしかと通じた。後は任せろ」

「ハウオウモンだー!!だが今の俺様は倒せんぞー リーフサイクロン」

ハウオウモンの体がよりいっそう輝きだす。

「スターライトエクスプロージョン」

ハウオウモンからでる光にペタルドラモンは焼き尽くされた。

「す、すごい」

「さすが鳥系の頂点に立つデジモンですね」

「私はこれで姿を隠す。ガルダモン、先ほどの気持ちを忘れないでくださいな。それではな」

そしてハウオウモンはどこかに飛び去っていつてしまった。

「ひとまず戻りますか」

「そうね、
帰りましょう」

鳥の樂園！？飛翔せよガルダモン（後書き）

次回予告

達也と友哉がリングを探していると歌を歌っていたボルケーモンにであう

そのまま通り過ぎようとしたがボルケーモンの指にはリングがあったのだ！

デジモンファイナリー第21話

「火山爆発！？ボルケーモン大噴火」

火山爆発！？ボルケーモン大噴火

「なんか、暑くないお兄ちゃん？」

「ああ、やっぱり火山かなんかあるんじゃないの、これ」

「ぼく、もうへとへとだよ」

「情けないぞ、コドラモン。それでも完全体に進化したやつか」

「そんなのかんけないよ。暑いモンは暑いのに」

いまコドラモンと話しているのは先ほど成長期まで進化したクダモンである。

「ねえクダモン、なんか聞こえない？」

「うん、なにやら歌っているようにも聞こえるが・・・」

「いや、かなり音痴泣きがするけど・・・」

4人が近づいていくとそこには背中に火山のようなものがついていて手にマイクを持ち熱唱している。

「うわーかなりの音痴だね。僕よりも経たかもよ」

コドラモンも相当音痴そうに見える。

「まあここは無視してこうぜ。ああいうのめんどくさそうだし」

「うん、そうだねお兄ちゃん。早くリングを探しにいこ」

「ちょっとまって、友哉。あらはリングじゃないか？」

クダモンが指差した先にいるデジモンの指にはたしかに達也の持っているリングと同じようなものがついていた。

「友哉、いくぞ。何とかしてあれをもらわないと。」

達也の言葉に友哉は首を縦に振り4人はそのデジモンへと近づいていった。

数時間前由香里とプロットモンはアグモンハカセに言われてとおりの場所にリングを探しにきていた。

「ここかなあーアグモンさんの言ってた遺跡って？」

「多分そうだと思うよ。入ってみよう」

二人が入っていくとそこには体自体が星の形をしてデジモンがいる。

「だれだ!!」

「あ、あのすいません。ここにリングがあると聞いてきたんですが・
・」

「ああもしかして君が選ばれし子供か？」

「えっ、はいまあそうですけど。こっちがパートナーデジモンのプロットモンです。」

「これはすまない。きみがアグモンハカセの言っていた選ばれし子供か。私はスターモン。このリングを守護しているものだ　さあこのリングを受け取るがいい。」

「えっ、いいんですか！？あなたはこれを守っているんじゃないんですか？」

「いや、いいんだ。このリングはアグモンハカセたちと一緒に守ってきたものなんだが今アスタモンの魔の手からデジタルワールドを救うためにた人間が必要だとわかったんだ。だからこれを君に託す。デジタルワールドを頼む。」

「はい、わかりました。がんばります」

「やったね、由香里」

「では、あちらにワープゾーンがあるのでそちらにアグモンハカセのところにつながっている。ちなみにこちらから一方通行だ」

二人がワープゾーンに入ったとき入り口のほうからなにやら音がする。

「な、何なの！？」

「由香里、あれっ」

そこには闇の闘士ダスクモンがいた・・・

「おっ、お前は闇の闘士のダスクモン。この場所がばれるなんて！」

「選ばれし子供を・・・消す」

ダスクモンがそういった瞬間すでにこちらに向かってきていた。

「選ばれし子供には手を出させない！メテオスコール」

スターモンの体から無数の星の形のがはっしゃされた。

しかしスターモンの攻撃はあっさりとダスクモンの刃にはじかれてしまった。

その間にも由香里たちは転送されようとしていた。ちょうどあと10秒だ。

「スターモーン、あなたも早く逃げてー」

「由香里、私もたたかうよ」

「だめだ、今のお前たちじゃかなわない。すぐワープするからっ」

そういった瞬間ダスクモンの刃がスターモンに振り下ろされそれと同時に由香里とプロットモンもワープする。

「スターモーン」

時間は戻って達也たちはボルケーモンと話していた。

「なあ、そのリング俺たちに譲ってくれないか？」

「ああ、これか。別にいいぞ。」

「えっ、本当にいいの!？」

「いいぞ、これはさっきあっちのほうで拾ったものだからあげるぞ。はい」

「わあーい、ありがとうボルケーモン。」

「だけど、帰る前に俺の歌を聞いていってくれ」

（「なあコドラモン、ボルケーモンってすっげえ音痴じゃなかったけ？」）

（「うん、あれはかなりのひどさだよ。達也」

（「でもリングももらったんだしき、聞いていったほうがいいんじゃない？」）

「聞いてきますよ、あなたの歌」

「ありがとうお前たち。じゃあいくぞ。むげーーんだいなーー」

達也たちの予想どおりボルケーモンの歌は破壊的にひどかった。しかもなぜかボルケーモンの背中にある火山が噴火していた。そしてそれに共鳴してか近くの火山も活動し始めた。

「ちょっと、あれやばいって。ボルケーモン」

「そうさーいーとし……」

突然ボルケーモンの声が途切れた。

4人が、目を開けた瞬間ボルケーモンは後ろから突き刺されていた。そしてボルケーモンは消えていき、そこに立っていたのは闇の闘士ダスクモンだった。

「ダスクモン、進化だコドラモン」

コドラモン超進化ーーメガロダイノモン

コドラモンが進化したとたんダスクモンがせまってくる。お互いの刃がぶつかり合い鏝迫り合いになる。

体格的にはメガロダイノモンが圧倒的に有利なのにダスクモンはぜんぜん押されていない。

「クダモン進化できる？」

「ああ、いけるぞ友哉」

クダモン進化ーエンジェモン

「ホーリーロッド」

エンジェモンがダスクモンに攻撃するが傷ひとつつかなかった。

「エンジェモン、一斉攻撃だ・・・ダイノインパクト」

「ヘブンズナックル」

2体の攻撃がダスクモンめがけて放たれるが・・・・・・「ガイ
ストアーペント」

ダスクモンも技を繰り出し応戦する。その力はほぼ互角であった。

「2たい相手でも勝てないのかよ」

「友哉、私も完全体に」

「うん、いまならリングもあるし・・・」 友哉がリングを掲げる

エンジェモン超進化ーーーーーホーリーエンジェモン

「今浄化してみせる。エクスキャリバー」

ホーリーエンジェモンのエクスキャリバーがダスクモンに向けられる。

「ダスクモン スライドエボリューション ベルグモン」

「マスターオブダークネス」

ベルグモンの口から放出されたエネルギー弾は達也たちを襲い一面を闇に染めていたのであった・・・・・・

火山爆発！？ボルケーモン大噴火（後書き）

次回予告

ベルグモの攻撃によって遠くに飛ばされた4人。

友哉とクダモンは偶然にもアグモンハカセの家の近くに飛ばされたのだが達也とコドラモンがいたのは現実世界だった。

デジモンフアィナリー第22話

「ただいま、リアルワールド」

ただいま、リアルワールド

ってなかったけど俺の住んでいるところは結構田舎の富山県だ。

その富山市の全校生徒350人ほどの小学校に通っている。親が離婚しているとはいえ小学校の反対側に住んでいるのでいつでも会えるし学校も同じだ。

学校は楽しい。でも授業参観とかの親が来る行事には母さんしか来たことがない。あいつが来たことなんて一回もないんだ。

周りの友達を見ると父親というものはうらやましいと思った。今はもう諦めたけどね。たまに母さんとも会えるしじいちゃんもいるから……コドラモンとも会えたしね。

ただいま、リアルワールド

「友哉っ大丈夫！？ 友哉！」

「お姉ちゃん？ここは？」

「アグモンハカセの家よ、近くで友哉とクダモンが倒れてたのよ。ほんとに心配したんだから。」

「ごめんおねえちゃん、ダスクモンがスライドエボリユーションしたベルグモンにやられちゃって……あっ、お兄ちゃんは？」

「達也もコドラモンいなかったの・・・どうしょ。」

このとき誰もが思っていなかった。達也とコドラモンが元の世界に戻っていたということを。

達也が気がついたときそこは見慣れた場所だった。

見慣れたというよりそこはもともと達也の住んでいる家。十数日前に達也たち7人がパティーしていた場所だった。

隣にはコドラモンが倒れている。

「コドラモン、大丈夫か？」

「うーん、なんとかね。それよりベルグモンは？」

「ベルグモンって言うかここデジタルワールドでもなくなってるし・・・。」

「ええー、それって達也たちの世界ってこと？」

「うん、それでここは俺の家だ。」

「達也の家って結構大きいんだね」

「ああ・・・」

それは達也にとってすごく言われたくないものだったのでそっけない返事をした。

達也が時間を見ようとデジタル時計を見る。

その時計は日時や気温もわかって便利なやつだ。

そこに移っていたのは気温27度日付8月15日午前11時56分58秒。

「やっぱり結構日たってるなあ。夏休みの宿題終わってないのに」

「しゅくだいってなあに？」

「学校から出された勉強するやつだよ。休み中にやらなくちゃいけないの」

「へえ〜大変だね」

二人が話しているとドアが開いた

「た、たつや！今までどこに行っていたんだ！」

入ってきたのは達也の祖父保科源内だ。

「おじいちゃん、あ、あの・・・」

デジタルワールドに行っていたなんて信じてもらえないだろうとおもってなかなか言い出せない。

「無事でよかった、達也怪我をしてないか？」

「え・・・なんで怒らないの？」

「怒るより前に無事に帰ってきてくれたのが一番じゃ・・・おかえ

り達也」

「うん、ただいま。あのねおじいちゃん正直に話すよ。こいつはコドラモン。デジモンだよ」

「デジモン？何だそれは。」

「ええつとね、デジモンっていうのはデジタルワールドっていうことは違う世界に住んでいる生物何だ。それでこのコドラモンは僕のパートナーデジモンだよ」

「よろしく、達也のおじいちゃん」

「うーん、そのデジモンっていうのはにわかに信じられないがここにいるのだから信じよう。」

「ねえ、やっぱりこんなに日がたってるから相当騒ぎになってるよね・・・」

それは当たり前のことだ。7人もの子供たちが14日間もいなくなっていたのだから。しかしその達也の問いかけに源内はあっさり答えた。

「いや、それは達郎がいろいろと根回ししたそうで騒動にはならなかったんじゃない」

達也はその言葉に驚いた。たしかに達也だけではなくほかの子供たちの親が心配するだろうからそんなことをしたのだと考えられる。しかしあの親がそこまですることは今までも一度もなかったのだ。だから達也は祖父の言葉が信じられなかった。

「あいつがそこまで・・・もしかしてっ！」

いきなり達也が駆け出した。向かう先は父、達郎の研究室だった。

（「デジタルワールドに行く直前、たしか健士はあいつの部屋からひっぱたコードをパソコンにつないでた。その瞬間に一気に目の前が光り始めたんだ。」）

達也が研究室にたどり着き勢いよくドアを開ける。

「おお、達也。久しぶりだな。デジタルワールドはどうだった？」

達郎は不敵な笑みをしながら言った

「やっぱりお前のせいだったのか!!」

「父に向かってお前とはなんだよ、達也。それにこれは研究だ。デジタルワールドという未知の世界へのな」

「ふざけんなっ！そんな研究のために俺たちは死ぬかもしれなかったんだぞ。」

「ちゃんと生きてるじゃないか。それに大切な友達にも会えただろ。」

確かにそれは本当のことだ最近転向してきた純樹やほかのみんなともさらに絆が深まったしなによりコドラモンに会えたんだから。だから達也は言い返せなかった。

「くそっ」

達也は部屋をとびでて自分の部屋へと走った。
今の達也は怒りと苦しみ悲しみとが入り混じっていた。

（「みんな、ごめん」）

達也の部屋の前にはコドラモンと源内が待っていた。

「達也・・・」

「ごめん、一人にさせて」

達也は一人で部屋に入っていくそつとドアを閉めた。そこには源内とコドラモンがとりのこされた。

二人とも心配そうに達也の後姿を眺めてた

「達也・・・」

「一人にしてあげなさい、コドラモン君。あの年でこんな現実はずがにきびしいだろう。」

「うん、おじいちゃんなんか食べるものない？」

「わしが作ってやるぞ。達也の友達なんだから張り切って作るぞ」

この後コドラモンあまりのまずさに一瞬気を失いそうになるのだった。

友哉が目を覚ましてから15分後に純樹も帰ってきた。

リングは探したがみつからなかったようだった。

アグモン博士に呼ばれて一室に集まった子供たちが達也とコドラモンがいなく重い空気が流れていた。

「みんなお疲れ様だぎゃ。リングをゲットするだけではなく完全対に進化した後藤氏まで倒してくるなんてすごいだぎゃ。達也のことは残念だったけど……」

先ほどから由香里が泣いている……。いつもしつかり者でめったに泣かない由香里だが実の兄が死んだかもしれないのだから仕方ない。

「達也は生きてるよ！絶対……いき……てるって……」

亜沙も達也とは母親同士が学生時代からの親友であったため生まれたときからの知り合いだといってもよい。

だから亜沙も涙をこらえてはいるが涙目になっておりあきらかにおかしくなっている。

ほかのみんなも同様に隠せなくなっている。

「亜沙、大丈夫だよ。保科君は絶対大丈夫だって。」

「そうだぎゃ、達也とコドラモンが生きていることを信じようだぎゃ。次にこれからのことだがアスタモンは今リアルワールドに行くときの五闘士に代わる部下を集めているらしい。締め切りがもうすぐということから近いうちにリアルワールドに向かうらしい。なので明日にはここを出発してアスタモンがいる城に向かってほしいだぎゃ」

「そんな！今達也さんがいなくなってみんなこんな状態なのに」

「達也が生きてると信じるならなおさら行ったほうがいいだぎゃ。」

「それはどういうこと？」

純樹が聞き返す。

「達也が生きてるとしてどこにもいないならダスクモンに捕まってアスタモンのところにいると考えるのが妥当だぎゃ。」

「コドラモンも一緒についてことだな」

「そうだぎゃ、だからみんな行ってほしいだぎゃ。これは達也とコドラモンを助けるとともにみんなの世界を救うことでもあるんだぎゃ。」

由香里がいつの間に泣き止んでおり立ち上がった

「行こうよ、みんな。お兄ちゃんを、私たちの世界を救うために・・・」

由香里に続き亜沙、ほかのみんなも立ち上がる。

「そうね、私たちにしかできなさそうなもの」

「ありがとうだぎゃ、今日はまず体を休めて明日に備えるだぎゃ。」

（「・・・順調だぎゃ。あの計画へ」）

くアスタモンの城く

アスタモンの部屋の一室。そこにはアスタモンがいてなにやらだれかと通信しているようだった。

「なぜデジタルゲートを開いたんだ？せっかく邪魔者を消せるところだったのに」

「私も人間だ。子供一人ぐらい助けてやってもいいだろう」

「まあ、いい。一人だけなら敵にはならないしな。まあこれからもよろしく頼むぞ・・・・・・・・・・保科達郎。」

ただいま、リアルワールド（後書き）

次回予告

子供たち6人とデジモンは達也とコドラモンを探すためにアスタモンの城へと向かった。

しかしそこには圧倒的な力を誇るダスクモンが待ち構えていた。

デジモンファイナリー第23話

「真の闇の闘士」

人物設定

保科源内（67）

達也の祖父で保科邸で隠居生活をしている。

とても優しく達也のよき相談あいてである。

料理がものすごく下手。

保科達郎（38）

達也の父でデジタル工学の研究者。

かなりの功績を残しているため財力があり学校のグラウンド並みの大きさの家を持ち敷地内に研究所を持っている。

研究に没頭するあまり家庭にはかかわらずそのせいで妻は由香里を連れて出て行った。

今はデジタルワールドの研究をしている。

真の闇の闘士

（「もういやだ、こんな人生。あいつのせいでもう滅茶苦茶だ。みんなにも合わせる顔がないよ」）

先ほどから達也は自分のベットに突っ伏して泣いていた。自分の父親のせいでみんなが死ぬかもしれないはめになったのだから。

（「もう死にたい・・・し・・・ぬ・・・やだ・・・こわ・・・い・・・」

デジタルワールド

「そろそろ出発しましょう。早くお兄ちゃんを・・・」

「うん、行きましょう。早く達也のところに」

「みんな、準備できたし行きましょう。ねえホークモン。」

「はい、コドラモンも忘れずに。」

こうして子供たちはアスタモンの城へ向かった。

「それでコドラモン君は達也のパートナーになったのか」

「うん、そうだよ。僕たちは仲良しだよ。」

「そうか、これから達也のことを頼むぞ。」

「うん、ずっと一緒だよ」

「あはははは、達也が元気になるまで遊んでるか。」

「やったー。遊ぼうー」

「ここがアスタモンの城ですか。大きいですね。」

「ええ、さすがというべきでしょうか。外から見てもどす黒いエネルギーがあふれ出してるのがわかります。」

「早く行きましょう。早く」

「由香里、まだいけそうにないよ」

アスタモンの城の門が開く。

そこに現れたのは闇の闘士ダスクモン！！

「やっぱり・・・あいつ、とてつもなく強いよ。ホーリーエンジェモンとメガロダイノモンでも勝てなかったやつ。」

「でもやるしかないよ。フローラモン、お願い。」

「うん、いけるよ。」

フローラモンがワープ進化してリリモンになった。

それに続いて他のデジモンもプロットモンとチルノモンを除いて完全対に進化していく。

「・・・行くぞ・・・」

ダスクモンがいきいきに突っ込んでくる。

「皆さん連携をとってください。ケルドガンナモンは後方から援護射撃をホーリーエンジェモンとテイルモンは前に出て。リリモンとフリーズモンはその後ろから射撃をお願いします。」

それぞれが定位置につき先頭にいるホーリーエンジェモンがダスクモンの刃を受け止める。

「お前を絶対倒す。」

ダスクモンはエクスカリバーをはじき前に進む。

「ネコパンチ」

「プラチナブリザード」

「フラウカノン」

三体の攻撃がダスクモンを襲う。

「ガイストアーペント」

ダスクモンの体の目からビームが放たれ相殺される。

「ダスクモン スライドエボリューション ベルグモン」

「あいつの攻撃力はすごいよ。みんな気をつけて。」

友哉は以前味わったダメージを思い出す。

「みんな、ベルグモンを止めてくれ。ディバインバスターで打ち落とす。」

「わかった、みんな援護を頼む。ホーリーゲート。」

ホーリーエンジェモンがエクスキャリバーで円を描きそれが開きまわりにあるものが吸い込まれていく。

「テンプテーション」

「キャッツアイ」

「プラチナブリザード」

「ぐわあああー」

ベルグモンの動きが止まった。

「今だああああー」

「行くぞ、ディバインバスタアアー」

ベルグモンに直撃し地上に落下し煙が舞い上がる。

「やったの!？」

煙が晴れてくる。そこには・・・「」「」「ダスクモン」「」「」

「子供たちを・・・倒す」

ダスクモンが近くにいた由香里に斬りかかる。
誰も間に合わない。

「きゃあー」

そのときデジヴァイスが光りダスクモンにあたる。

「ウオオオー」

ダスクモンのデータが分解され再構築される。

「ウオオー、レーベモン」

そこには真の闇の闘士が現れた。

真の闇の闘士（後書き）

次回予告

真の闇の闘士に進化したレーベモンと和解した子供たち。
ともにアスタモンに立ち向かう。

デジモンフアイナリー第24話

「追いかける、アスタモンを行かせるな！」

追いかける、アスタモンを行かせるな！

そこにはダスクモンでもベルグモンでもなく人型の闇の闘士がいた。

「ダスクモンじゃない！？・・・あれは・・・」

「あれは・・・ちょっと待ってください。今デジモン図鑑で・・・わかりました。レーベモン、たしかに闇の闘士です。」

「やっぱり闇の闘士じゃん。でも3つ目の形なんて・・・」

誰もが思う疑問を純樹が言う。

「お・・・俺は・・・操られてたのか」

「操られてたって、アスタモンに！？」

「そうだ・・・俺はアスタモンの闇の力でおぞましい闇の闘士ダスクモンになってしまったんだ。すまない、」

すると由香里が優しくささやく

「いいんだよ、操られてたのなら仕方ないよ。」

「俺を許してくれるのか？お前たちを殺そうとしたやつをだぞ」

「そういう理由があるんだもん。でもおにいちゃんがどうなったかわからない？メガロダイノモンのパートナー」

「あの時のやつか・・・死んではないはずだぞ。そこにいる子供と同じところに飛ばしたはずなんだが」

「友哉君の近くには誰もいなかったよ。お兄ちゃんはどこに・・・」

「ちょっとまで。たしかあの時一瞬だけゲートのようなものが見えたような気がする。」

そこに亜沙が割ってはいる。

「それってどういうこと？達也たちはどこに行ったの？」

「おそらくあれは、人間界へのゲートだ。」

「それって僕たちの世界！？じゃあ達也さん達は無事ってことですか？」

「ああ、おそらくな」

レーベモンの言葉を聞き皆は安堵する。

「よかったね、由香里ちゃん。でもこれからどうする？」

「アスタモンを追いかけるのはどうだ？あいつはもう30分ほどでお前たちの世界に向かうぞ。」

「そうね、追いかけましょう。私たちが呼ばれた本当の目的がアスタモンを倒すことだもの。」

りんが提案したことに皆が賛同しレーベモンを先頭に城の中に入っ

ていった。

（廊下）

「やはり獣型のほうが走りやすいな・・・レーベモン スライドエボリ ユーション カイザーレオモン」

「ねえ、カイザーレオモン。こんなに堂々と入ってきてるのに敵は気づいてないの？」

「おそらく気づいているだろうな。しかし今は出発の準備でかまってる暇がないのだろ。」

「そっか、急がないと。」

純樹が皆を急かす。

「もう、つくぞ」

今までで一番大きい扉が開く。そこには一体のデジモンがいた。

「あれがアスタモンなの？」

「違うぞ、あれはアスタモンが集めたデジモン・・・カメラモンだ。」

そこにはいろんなデジモンのパーツが合わさった合成獣。すべてを破壊するまで止まらないバケモノだ。

「こんなときにこんなバケモノと会うとわな。みんな行け、まだ扉は開いている」

子供たちが扉に入っていく。残りは由香里だけである。

「カイザーレオモンも早く来て。」

「シュバルツ・ドンナー」

カイザーレオモンからキメラモンへとビームが放たれる。その攻撃はキメラモンに当たるがなんのダメージも与えられない。

「ハイブリットアームズ」

キメラモンの無数の腕がカイザーレオモンを押しつぶす。

「くっ……はやくいけえー。」

「でも……でもー」

テイルモンが由香里を引っ張っていく。

「いやあー……」

「ヒートバイバー」

キメラモンの口からカイザーレオモンへ灼熱の炎が発射される。それは完全体でもトップクラスであるケルドガンナモンのディバインバスターよりも強大である。

それと同時にゲートが完全に閉じるのであった……

追いかける、アスタモンを行かせるな！（後書き）

次回予告

ひとつの犠牲とともに元の世界に帰ってきた子供たち。

しかし達也はまだ立ち直れていなかった。

デジモンフアイナリー25話

「迫りくるアスタモンの恐怖。俺たちの町を守れ」

迫りくるアスタモンの恐怖。俺たちの町を守れ

ようやく達也は落ち着いた。しかしまだ一人で悩んでいるのであった。

（「どうすればいいんだよ・・・みんな・・・」）

ピロピロピロ

達也の腰についているデジヴァイスから音が流れる。

「なにこれ、デジヴァイスが・・・」

音と同時にデジヴァイスから立体映像がでる。

「これは・・・現在位置に点がひとつで・・・離れたところに点が六つ・・・ってことはみんなか？」

（「みんなが帰ってきた・・・ってことはアスタモンがこっちに来てるってこと！！」）

（「やばいってこれ。俺たちの町がアスタモンにやられてしまう・・・こんなことしてる場合じゃない。」）

達也は立ち上がり部屋から飛び出していった。

「ちっ、こっちがこんなにデジモンに負荷がかかるとはな、しかもレベルが高いほどは。本番は少し時間を空けなければな。まあ成

熟期がこっちに来る途中はぐれてしまったがそいつらはそのままおいといていいだろう。」

アスタモンの計画は着々と進んでいくのであった。

「ここってどこなの？」

デジタルワールドから帰ってきた子供たちはとある山奥にいた。

「ちょっと待ってください・・・ここは長野県です。」

「長野って、何でこんなところに。富山とそれなりに離れてるじゃない」

「早く富山に戻ろうよー」

友哉が疲労のこもった顔で皆に言う。と全員賛成のよう。で方角を調べ始めた。

「皆さんちょっとこれを見てください。アグモン博士からのメールです。」

「なんて書いてあるんですが、健士さん？」

「東京に行け、アスタモンはそこにいると。」

「そんなに疲れてるのに・・・」

「しょうがないよ、いこ」

純樹が張り切っているように言う。

「なんで加納君そんなに張り切っているの？」

「だって僕たちだけ完全体に進化してないんだもん。せっかくレーベモンにリングもらったんだし。」

子供たちは東京へと歩き出した。

源内とコドラモンがテレビを見ていると扉が思いっきり開く

「コドラモン！！」

「達也元気になったんだ、よかったあ」

「心配かけてごめん、でも今はそれどころじゃないんだ。アスタモンがこっちにきたんだよ」

「それは大変だのう。事情はコドラモン君から聞いたよ。」

「うん、じいちゃん。俺行かなきゃ。」

テレビから緊急のニュースが流れる。

「ただいま入った情報です。富山市立東部中学校に突然地中からなぞの生物が出現しました。今は何の行動もしませんが危険ですので

周囲にすんでいる方はお逃げください。」

「東中ってすつげえ近くじゃん。コドラモン行くよ。」 「うん、わかった」

達也とコドラモンが部屋を飛び出していき源内ひとりが部屋に残された。

（「達也、がんばるんじゃ」）

東部中学校のグラウンド。そこには鼻にドリルがついているデジモン、ドリモゲモンがいた。興奮しているようでドリルをまわしながら。もぐったり出てきたりを繰り返している。

グラウンドで部活をしていた野球部たちはすでに避難していた。

「やっぱりデジモンだ。コドラモン進化だ。」

「うん、コドラモン進化ーダイノモン」

ダイノモンに進化するとドリモゲモンも気づいたらしく突進してきた。「ドリルスピン」

「ダイノフィンガー」

金属と金属が激しくぶつかり火花を散らす。

「いっきに終わらせる、ダイノブレス」

「クラッシャーぼ・・・」

ダイノブレスに対抗するようにドリモゲモンも攻撃しようとするが少し遅く体ごと吹き飛ばされ消えていった。

「はくなんとか倒したよ・・・コドラモン、やったな。」

「うん、でもなんか周りから変な目で見られてるよ」

周りの人たちはコドラモンを危険なものを見てるように警戒している。

「逃げよう、一旦家に戻ろう。」

迫りくるアスタモンの恐怖。俺たちの町を守れ（後書き）

続く

子供たち6人は東京を目指して順調に進んでいたが

アスタモンとはぐれたデジモンが純樹とチルノモンを襲った。
デジモンファイナリー第26話

「完全体進化！東京を目指せ」

完全体進化！東京を目指せ

リビングには達也とコドラモン、源内がいた。

「やっぱり、この方向って東京だよな？」

「そうだのおう、長野県辺りにいたのが今は山梨県には入ってるみたいだな」

さきほどカップヌードルを食べた3人はデジヴァイスから出る地図を見ていて。

「じゃあその東京ってどこに向かうの？」

「ああ、いくしかないよ。おじいちゃん・・・」

「行って来い、達也。お前たちにしかできないのだろう。」

「うん、行ってくる。」

「まだつかないんですか、健士さん？」

「東京まであと10キロぐらいですよ。もうちょっとですよ。」

「さすがにこの距離は疲れますよね」

「さっさと行って休みましょう。さあ行こう」

りんが張り切って先頭を歩いていた。

そんな中純樹とチルノモンは最後尾を歩いていた。

「純樹つかれた？」

「うん、僕今まであんまり外で遊ぶことなかったからそんなに体力ないんだ。」

「へえーそっか・・・まあ早く行こうよ」

・
・
・

「どうしたんだ、純樹？皆行っちゃうぞ」

純樹はある一点見つめながら止まっていた。

「チルノモン、あれってデジモンじゃない？こんなところに・・・
って行かないと」

純樹が見ていた先にはカラテンモンという天狗の姿をしたようなデジモンがいた。

「純樹、あれは完全体のカラテンモンだよ。」

「やばい、こっち来るよ。」

「やらせるか、チルノモン進化ーフリーズモン」

フリーズモンに進化した時にはすでにカラテンモンは目の前に来ていてフリーズモンを蹴り飛ばした。

「フリーズモン、完全体に進化しなくちゃ」

純樹がリングを掲げるも何も起こらない。

「なんで何も起こらないの？リングがあれば進化できるんじゃない？」

「氷のかぎづめ」

「悟り」

フリーズモンの前足での攻撃はカラテンモンにすべて読まれてしまいよけられる。

「衝撃波！！」

刀を一振りするとそこから衝撃波がうまれフリーズモンを吹き飛ばす。

そのあとすぐカラテンモンは標的をかえ純樹のもとへ近づいてくる。

「やばい、こっち来る。は、速い。わあーーーー」

そのときリングとデジヴァイスが光る。

フリーズモン超進化ーーーーフィンスモン

「やった、進化できた。でもあいつには行動をよまれる。」

「まかせろ、純樹」

というとフィンスモンは高速で移動し一回瞬きしたぐらいの速さでカラテンモンの前に来た。

「悟り」

「動きが読まれたからって相手より速く動けばいいだけだ。」

するとフィンスモンは一瞬でカラテンモンの後ろに回り

「ブリーズファング」

フィンスモンがそういいはなった瞬間、右前足が巨大化した。そしてカラテンモンの体をきりさいた。

「やった、フィンスモンっすごいはやいね。」

「純樹、背中に乗って。すぐ皆に追いつくから」

「うん、皆を乗せたらそのまま東京まですぐに行っちゃおう。」

完全体進化！東京を目指せ（後書き）

次回予告

東京につきひとまず休むことにした子供たちだが
ついにアスタモンが動き出すのであった。

デジモンフアインリー第27話

「最終決戦」

フィンスモン

データ種 氷獣型 完全体

チルノモンの完全体でアルフォースブイドラモンにはかなわないが
それに近い驚異的なスピードで移動することができる。

必殺技 アイスウォール 通常技 ブリーズフアング

最終決戦

「ついたー！ー！ー」

子供たちはフィンスモンにのって東京までやってきた。

フィンスモンが見つかる騒ぎになるので人がいそうなところに来ると退化させて歩いて一番近い駅までやってきた。

そこから東京中心部へ地下鉄で行くつもりであった。

子供たちは富山県民なので東京のことに詳しくないが健士のパソコンのおかげで何とか調べることができたのだ。

「チルノモン、お疲れ様。」

「健士君、お金足りる？」

「皆さんのを合計すれば10000円ありますから十分足りえますよ」

「よかったあ、でもプロットモンたちばれないかな？」

「人形みたいに動かなければいいんでしょう？大丈夫だよ。」

「でも早く休みたいよねーねむたいよ」

体力のある亜沙でもさすがに疲れているようである。

「大丈夫ですよ、亜沙さん。乗り換えはありますけど1時間ぐらいは同じ電車なので寝れますよ。」

「やったー、やっと寝れるね。由香里ちゃん」

「うん・・・おにいちゃんどうしてるかな・・・」

「達也君なら大丈夫だよ。こっちに来てると思うよ」

「純樹さん、ありがとう。お兄ちゃん、たまに頼りないけど本当はちゃんとしっかりしてると思うんだよね。」

「達也、妹に頼りないと言われてるよ。まあいこっか。」

「そろそろ力が戻ってきたな・・・行くか、お前たち」

アスタモンの後ろには完全体デジモンが並んでいた。

「さあ、はじめようじゃないか。」

「ついたー」

子供たちは無事東京駅についた。

しかしそのとき外から悲鳴が聞こえてきた

「まさか、もうアスタモンが!？」

「わかりませんが、とにかくいってみましょう。」

子供たちは地上へと上がると大量の人がいろんな方向に逃げ回って

いた。

警察が誘導しているがみんなパニックになって言うことなど聞いていない。

その原因は信号3つ先ぐらいにいる死神のようなデジモンであった。

「あれってアスタモンの集めたって言うデジモン!？」

「あれはメタルフロントモン、完全体です。」

「そんなっ、完全体が10体も」

子供たちが敵の強大さに戦うことをためらっていると警察官がやってくる

「君たち早く避難しなさい。ここは危ないですから」

しかし子供たちは今同じことを思い行動した。

一斉に子供たちは人々が逃げる方向と逆の向きに走った。

デジモンも一緒に走っていて普通なら騒がれるはずだが人々はパニックになり逃げ惑っているし第一、今はそんなこと気にしてられない。

メタルファンとモンは持っている鎌で周りのビルや停めてある車などの物というものをはいしていた。

「そんな早く止めないと……でも10体も」

「任せてください私たちなら大丈夫です。」

「ホークモン……わかった。お願い」

そしてプロットモン以外のデジモンは完全体へ、プロットモンは成熟期へと進化した。

「ごめん、由香里。私だけ完全体に進化できなくて・・・」

「テイルモンだけのせいじゃないよ。リングもあるのに進化させてあげられないんだもん」

「由香里・・・大丈夫。進化できなくても私は由香里を守るから」

「みんな行くぞ。ディバインバスター」

ケルドガンナモンの放った一撃は不意打ちのおかげもありメタルファンとモンの一体に直撃し倒すことができた。

しかしそれで敵もこちらに気がついたようで攻撃を仕掛けてくる

「ソウルプレデター」

振り下ろされた鎌から斬撃が放たれる。かろうじてよけることができたが数的にもこちらが圧倒的不利である。

達也は東京に行くため新幹線に向かっていった。

富山から新潟に行き、そこで乗り換えて東京まで行くつもりである。今は新潟駅までついたところで乗り換えのための切符を買おうとしているところだ。

「ええと、これでいいんだよな。」

「達也く腹減ったよ」

「我慢しろよ、急がなくちゃ行けないのに」

「緊急放送です。ただいま東京中心地に謎の生物が現れ暴れておりますので東京行きの新幹線は発車できなくなっております。くりかえ・・・」

「そんなもう現れたのか。それに新幹線が動かないなんて」

「達也、進化していきに行こうか？」

「いくらメガロダイナモンでも時間がかかりすぎるよ。」

そのとき達也が後ろから話しかけられる。

「君は保科達也君だね。それにそっちがコドラモン」

話しかけてきたのはスーツを着た男の人であった。

「あなたは・・・それになんでコドラモンの名前を？」

「わたしは首相の秘書をやっているものだ。単刀直入で申し訳ないが今すぐ来てもらおう。」

「首相って麻生さん！！でも俺たちは東京に」

「わかっている。表にヘリコプターがきている。それに乗って東京に行く。詳しいことは乗ってから話す。ついて来い」

「あ、はい」

「やっぱり、強い。こんなやつらを従えるなんてアスタモンはどれだけ強いだよ。リリモンがんばってー」

「結構厳しいわ。みんなとの連携も取れない。フラウカノン」

リリモンの必殺技はメタルファンとモンの必殺技に相殺させられる。一体のメタルファントモンがりんにソウルプレデターを放つ

「りんさーん」

ガルダモンがりんをかばい背中でメタルファントモンの技を受けてしまう。

「ガルダモン、大丈夫!？」

「なんとか、大丈夫です。しかしこのままじゃ厳しいですね。」

しかしそのときメタルファントモンたちは後ろに下がっていく。そしてこちらに近づいてくる一体のデジモン。細身の体からは一見、弱そうに見えるが体から放たれるおぞましい覇気が子供たちに伝わってくる。

「あれがアスタモン・・・」

「はじめして、私を倒すための選ばれし子供たち。私がお前たちが必死に追ってきた倒すべき相手だ。さあ、おまえたちの望みどおり戦おうじゃないか」

「いわれなくても、ブリーズファング」

最初に飛び出したのはフィンスモン。自慢のスピードを活かしアスタモンの後ろに回り切りかかった。

しかしその攻撃はアスタモンの持っていたナイフで止められ・・・

「ヘルファイア」

手から黒い炎が放たれフィンスモンに直撃する。

その攻撃は究極体クラスに匹敵しそうなくらいのものでフィンスモンはいつきに退化してしまった。

「チルノモーン」

「みなさん、一斉攻撃です」

「よくもチルノモンを！エクスカリバー」

「フラウカノン」

「シャドーウィング」

「キャッツアイ」

「ディバインバスター」

「そんな攻撃、効かん！マーヴェリック」

アスタモンの体から全方向に先ほどの攻撃と似たような黒い波動が出て五体の攻撃を無効化して回り一面を吹き飛ばす。
退化まではいかないがみんな動けなくなってしまった。

「いや・・・みんなが傷つく・・・死ぬ・・・」

由香里の頭の中にはリングのために犠牲になったスターモン、子供たちを逃がすためにキメラモンと戦ったカイザーレオモンの姿思い浮かべられていた。

「もう誰かがいなくなるなんて・・・やだよ・・・
・・・勝つんだ・・・もう誰も死ななくていい、元の
世界に戻すために!!」

由香里の言葉にリングとデジヴァイスが反応して光りだした。

「テイルモンっ!」

テイルモン超進化ーーーーエンジェウーモン

「完全体が一体増えただけでどうにかなると思っているのか?」

「もうあなたの思いどうりにはさせないわ。みんな私の矢に力を」

「後は頼むぞ、エンジェウーモン」

他のデジモンは自分の残りの力をエンジェウーモンの矢に送ったあと退化していった。

力を受け取り矢が強力な力をつけているのだ。

「ここまでの力を出すとは・・・メタルフロントモン」

「くらえ、ホーリーーアローーー」

メタルファントモンがたてになるがエンジェウーモンから放たれた矢はそれを簡単に突き破りアスタモンに突き刺さる。

「そんな・・・わたしはこんなところで・・・」

アスタモンのデータが消え去った。

エンジェウーモンは力を使い果たしてプロットモンに退化した。

「「「「「やったー」」」」」」

由香里はプロットモンを抱きしめ他の子供たちもそれぞれのパートナーと喜び合っている。

「あれ、なんでこの黒い雲晴れないの？」

友哉が言った黒い雲とはアスタモンが出てきたときに一緒に現れたものだった。

「確かにそうね、アスタモンは倒したはずなのに。」

そのとき上空から声が聞こえた・・・

「だから言ったであろう。そんなもので私を倒せるわけがないと。」

「そ、そんな・・・この声は!!」

みんなの目線の先・・・雲の中から現れたのは四本の足を持ち胴があり背中には漆黒の翼

アスタモンが進化した究極体デジモン。

魔王グランドラクモン
が降誕した
・
・
・
・

最終決戦（後書き）

次回予告

究極の力を待った闇の帝王。その力は圧倒的でもはや進化する力も残っていないデジモンにもうなすすべはなかった。

そして達也とコドラモンは間に合うのか！！

デジモンファイナリー最終回

「終わり、そして・・・」

終わり、そして・・・

東京中心部は壊滅状態になっていた。

高くそびえ立っていたビルは崩れ落ち、東京タワーも消滅した。

避難は完了しているが死人も出ているだろう。

その元凶は堂々と何時間前かにはにぎわっていた街があったところを歩いている、全長50メートルはあるだろう化け物。

すべてを闇で覆いつくす帝王だ。

子供たちはもう力を使い尽くし進化できなくなっているデジモンと隠れていた。

「もう、どうしようもないよ・・・あんなやつに勝てるわけないよ。」

「

「ごめん、私たちにもっと力があれば」

「フロラモンたちは十分戦ったよ・・・達也たちがいればあいつを止められるかもしれないのに」

「いや、いくら達也君たちでも究極体には勝てないよ」

「そんなことないよお兄ちゃんとコドラモンならやってくれる」

「りんさん、あれは!?!」

ホークモンの指差す先には戦闘機の小隊が飛んできていた。日本駐留のアメリカ軍基地からかきた戦闘機である。

「アメリカの戦闘機・・・あんなのじゃ倒せるわけない」

戦闘機からミサイルが発射しグランドラクモンに直撃する。

しかし外傷などは見られず触られた程度にしか思っていないのだろう。

「こちらの文明でデジモンに勝てると思うな！！」

グランドラクモンは自らの羽を動かし風を起こした。

ただそれだけの行為なのにもものすごい風が発生して戦闘機を吹き飛ばす。

「そんな、やばいよ。もう・・・おにいちやん・・・」

そのとき上空からマイク音が聞こえて来る

「ええと、ここを押せばいいんですか？」

その声は達也だった。久しぶりの登場なのにマイクが既に入っていることも知らずしゃべってしまったのだ。

なんと情けない登場である。

「もうーおにいちやんってば、久しぶりの再開なのに情けないんだから」

「まあ達也らしいっていえばそうだけどね」

「達也、これもう入ってるんじゃない？」

「えっ、うそ、マジ！？はずかしっ・・・ええとみんな久しぶり。・
・いや、挨拶してる暇なんてなかった。コドラモンいこ」

「ちょっといくって二人とも。こんな上空から。」

「高いところは苦手だけど行くしかないんで」

そういうと達也とコドラモンはヘリコプターの扉を開け飛び降りた

「うあ、ちょやっぱたかいてーーーーー」

「達也、進化だよーーーー」

「あ、そうだった。コドラモーーン」

コドラモンワープ進化ーーーーメガロダイノモン

メガロダイノモンは達也を手に納めグランドラクモンの前に降り立つ。
つ。

「みんな待たさせたな。」

達也が地上に降り立つと皆が駆け寄ってくる。

「お兄ちゃん、心配させないでよ」

由香里が抱きついてくる。一番心配していたから無理もないだろう。

「ごめん、由香里。俺が先に戻ってきたのにはある事情があるんだ。でもいまはそんなこと話している暇じゃなさそうだな。」

「何が来ると思ったらただの餓鬼と完全体一体だけとは・・・私をなめてるのか!!」

「いやあ、進化してるとは思ってたからね。まあ問題ないと思うけど」

「お前は馬鹿か、私は究極体だぞ。そんな完全体一体なんかで」

「究極体に進化できるとしたら」

「な、なに!!」

達也の言葉にグランドラクモンだけではなくそこにいる全員が驚いていた

「達也さん、究極体に進化だなんてどうやって?」

「メガロダイノモン、来い」

達也はそういつてデジヴァイスを掲げる。

「おう、ダイノインパクト」

なんとメガロダイノモンは達也に向かって攻撃を放ったのだ。

「おにいちゃーーん」

「たつやーー」

亜沙や由香里が達也の名前を叫ぶ。

達也がいたところには煙がまんえんして状況がわからなくなっている

「フっ、ハアーハッハ・・・死んだか・・・勝てないとわかりお友達に殺してもらうことにしたのか」

「死んでないぜ」

「なに!!」

誰の顔からも驚愕の色が伺える。それもそうだ。あんな攻撃食らえば生きてるほうがおかしい

「本当はあの父親から教えてもらったものだから使いたくなかったんだけどなあ」

煙が晴れると先ほどと変わらない達也の姿があった。

ひとつ違うところは右手に持っているデジヴァイスが異常なほどに光っていることである。

「な、なんなんだお前は!!」

「この力はなパートナーとの絆の力だ。本当に心が通いあっている人間とデジモンとの絆。これがあれば俺たちは無限の力を得られるん

だ」

「そんなことがあってたまるか。わたしはデジタルワールドという弱肉強食の世界で生き残るために、進化するために他のデジモンを倒し、倒して時には我が同朋の命までとってここまで進化してきたんだ。そしてこんな世界を作った人間に復讐する為にリアルワールドにやってきたんだ。だからそんな絆なんかの力で進化するなど認めんぞ!!」

「じゃあ見せてやるよ、行くぞ」

達也がデジヴァイスを掲げると溢れんばかりの光がメガロダイノモンに注がれる

メガロダイノモン究極進化ーーーーエンペラーモン

そこに現れたのはデュークモンと同じぐらいの大きさで漆黒の鎧をまとい腰の右側には身長にあったサイズの刀を左側には明らかに大きいサイズの刀を持っている。

そして背中に騎士の白いマントを羽織っている。

健士はすぐにデジモン図鑑で目の前にいるデジモンを検索した。

「あれはエンペラーモン、究極体。暗黒騎士型・・・ワクチン種」

「本当に進化した・・・すごい」

「そんな小さくなるとは弱々しいぞ」

口ではそんなこと言っているが明らかに動揺している。わかるのだ・
・デジモンの本能的にこいつは危険だと

「アイオブザゴゴン」

グランドラクモンの目から巨大な光が発射される。

その瞬間エンペラーモンは右腰にある刀を抜きその攻撃を真っ向からうける。

「紫電一閃」

刀には黒い炎のようなのがまとっておりグランドラクモンの攻撃を一閃する。

そのこうげきはそのままグランドラクモンにも直撃する。

「お前にはこのエンペラーモンを倒すことはできない。今ここでお前を削除する」

「クックック、ハッ、ハハ、ハハハハ。ふざけるな、私はこんなところで死ぬわけには行かないのだ。人間を根絶やしにするまでは」

そう言った途端グランドラクモンの周りにはどす黒いオーラが現れる

「何あれ！？あいつにまだこんな力が？」

するとクダモンが訂正する。

「違うぞ友哉、あれは恐らく人間のマイナスの気持ちや怨念が集ま

「つた闇のパワーだ」

「わたしはあーーーーークリスタルレボリユーーーーション」

「くつ、紫電・・・」

エンペラーモンは先ほどと同じようにはじき返そうとしたが相手のパワーが桁違いにあがっていて吹き飛ばされた。

「エンペラーモン！このままじゃやばいよ・・・マイナスの気持ち・・・そうだ、エンペラーモンお前も思い浮かべるんだ、人間のプ
ラスの気持ちを。今全世界で勝ってほしいって思っている人たちの
気持ちを！！」

「たつや・・・わかつた」

「ねえ、みんな私たちも何か協力できることあるんじゃない？」

「協力って・・・そうだ。このデジヴァイスは前ダスクモンを闇から開放させてあげられた。今回も何かできるかもしれない」

そういうと由香里はデジヴァイスをエンペラーモンに向ける。他の子供たちも同様のことをする。

するとそこから光が伸びエンペラーモンに集中していく。

「わかった……みんなも気持ち伝わってくる。これならいける」

エンペラーモンが左腰の刀に手をかけ構える。

「わああーーーー、クリスタルレボリユーーーーーショーーーーー
ーーーーーン」

「黒龍奥義爆凰覇」

エンペラーモンの居合いから放たれた斬撃は黒い竜の形をしてグラ
ンドラクモンの技を飲み込みさらに大きくなり突き進む

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そしてグランドラクモンを飲み込み消滅していった。

暗黒の雲も晴れ渡り青空と太陽が伺えて来る。

エンペラーモンはコドラモンに退化して達也の下に駆け寄ってくる。

「たつやーやったー」

「やったな、コドラモン」

子供たちとデジモンたちはそれぞれ喜びを分かち合う。

本当に終わったんだ。長かったようで短い戦いが。

しかし・・・いきなりそこにデジタルゲートが開く

「これは、デジタルゲート!? なんてこんなところに?」

「まさか、あいつ！」

達也には思う節があるようだ。

「えっ、あっホークモン」

そして子供たちのそれぞれのパートナーデジモンだけがゲートに吸い込まれていく」

「チルノモンまって」

純樹が追いかけようとゲートに触れると電気が流れるような痛みが体に走りはじかれたのだ。

「そんな、プロットモン、プロットモーン」

そしてあっという間にゲートは閉じてしまったのであった。

突然の別れ

これが達也たちの冒険の結末である。

8月31日

小学校の2学期始業式の日である。

「はあゝなんで8月31日から学校行かなきゃいけないんだよ」

「文句言わないの、早く準備しなさい。由香里はもう食べてるわよ」
かつて達也の家にはいなかった女性の声。その人は達也と由香里の母、平川恭子である。

あの事件の日以来達郎の姿は見えなくなり多額の金を残してどこかに行ってしまったのである。

達郎がいなくなったことや由香里の強い要望で恭子と由香里が達也の家に来て一緒に暮らすことになったのだ。

「由香里、じいちゃんおはよ」

「おはよう、達也」

「おはよう、お兄ちゃん。ちょっと遅いよ。始業式から遅刻したらどうするの」

「大丈夫だって。」

こうして二人は朝食を食べ学校に向かったのである。

事件の様子は危険を顧みないある局のカメラマンが撮影しておりあそこにいる子供たちが達也たちだったことがばれている。

だから報道陣は多少は来たが麻生首相の配慮のおかげそこまで騒ぎにならなかったのだ。

「お兄ちゃん、リングははずしたほうがいいよ。先生に没収されちゃうよ。」

「そうだなさすがにこれはばれるか」

「達也ー、由香里ちゃん」

向こうから走ってきたのは亜沙と友哉である。

一通り朝の挨拶を済ませた4人はまた学校に向かって歩き出した。

4人は昨日見たテレビの話とかで盛り上がっていた。

そのせいで達也達はきづかなかった。

後ろに小さなゲートが開いていたことに・・・

終わり

終わり、そして・・・(後書き)

http://ncode.syosetu.com/n0707
k/
続編です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5142m/>

デジモンファイナリー

2011年2月27日16時57分発行